

# 国際子ども図書館 の窓

子どもの本は  
世界をつなぎ、  
未来を拓く!

第10号  
2010.3

表紙デザイン：熊谷 博人氏

## 【国際子ども図書館の2009年】



講演会「本と子どもと大人をつなぐ場所 “本の城” (IJB) での20年」  
講師：ガンツェンミュラー文子氏 (10月24日) p.11～14、40



児童文学連続講座「いつ、何と出会うかー赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」  
(11月9日、10日) p.19～21、41



講演会「インド児童文学の現在」  
講師：シュニル・ゴンゴパッダエ氏 (12月13日) p.41

## 【国際交流】から

イタリア (p.26~27)



IFLA 大会会場入口



IFLA 大会の見学ツアーで訪れたミラノ郊外のロツターノ子ども図書館。水車小屋を改築した建物で、室内に残された古い道具も利用した冒険心を誘う楽しい空間になっている。

韓国

国立子ども青少年図書館 (p.23~24)

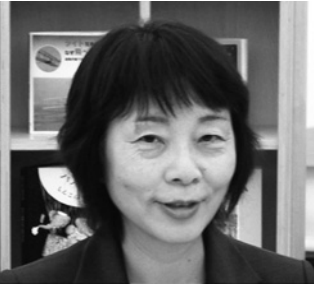


外観



絵本の国 (子ども資料室奥)

## はじめに



第二次世界大戦後の困難な時代を生きる子どもたちへの贈り物として、1949年にイエラ・レップマンの手により設立されたミュンヘン国際児童図書館（**IJB**）は一昨年創立60年を迎えました。一方、21世紀を生きる子どもたちへの贈り物として、2000年に設立された国際子ども図書館（**ILCL**）は今年開館10周年を迎えます。国際的な児童書研究の二大拠点とも言えるこの二つの図書館の架け橋的存在であり、**IJB**の東アジア部門担当者として長年活躍されてきたガンツェンミュラー文子さんをお招きしての意見交換会や講演会は、**ILCL**のこれからの活動を考える上で大変参考になるものでした。

2009年は、いくつかの新しい試みに挑戦しました。企画展示「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」に合わせて、夏休みに子ども向けのスタンプラリーを実施しました。子どもたちの評判は上々でしたが、展示への関心と呼び起こすにはもうひと工夫必要な気がします。また、11月に実施した児童文学連続講座「いつ、何と出会うかー赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」では、これまでの国別・ジャンル別アプローチから離れて、年齢別アプローチを初めて試みました。意見交換会もグループ別にしたところ、受講生同士の交流や情報交換に役立ったようです。ただ、会場の関係から、今回もやむなくお断りした方が多数に上りました。増築による研修室の整備が待たれるゆえんです。

さて、2011年度の着工、2015年度の竣工を目指して、いよいよ増築・改修のための設計作業が始まりました。情報システム面では、2012年1月に国立国会図書館に新しい図書館システムが導入される予定で、**ILCL**の来館利用にも変化が生じるほか、独自に開発・運用してきた児童書総合目録もこの新システムに統合する予定です。ここ数年は、現行のサービスを維持しつつ、中央館とのシステム統合と新館開館の準備作業を進めていくことになります。またこの間、インターネット等による情報発信を強化し、全国的なサービスの充実も図ります。

最後になりましたが、開館10周年と国民読書年に当たる2010年は、記念展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」を始め、様々な記念行事を企画しております。どうぞ上野の山に足をお運びください。

2010年3月

国立国会図書館国際子ども図書館長 齋藤 友紀子



<目次>

【口 絵】

【はじめに】 = 齋藤 友紀子 1

【2009年のハイライト】

展示会「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」  
= 「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」展示班 3

展示会「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」に寄せて  
—鉄道博物館からの資料 = 佐藤 美知男 6

展示会「ゆめいろのパレットIV—野間国際絵本原画コンクール入賞作品  
アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」 = 「ゆめいろのパレットIV」展示班 8

世界をつなぐ子どもの本—2008年度国際アンデルセン賞・IBBY  
オナーリスト受賞図書展 = 「世界をつなぐ子どもの本」展示班 10

本の城—本と子どもと大人をつなぐ場所 = ガンツェンミュラー 文子 11

平成21年度児童サービス連絡会—公共図書館への支援の実際と課題—  
= 児童サービス課 15

児童文学連続講座「いつ、何と出会うか—赤ちゃん絵本からヤング  
アダルト文学まで」 = 企画協力課企画係 19

いつ、何と出会うか—平成21年度児童文学連続講座の2日間—  
= 宮川 健郎 20

電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテンツ「『コドモノクニ』  
掲載作品検索」 = 企画協力課企画広報係 22

【国際交流】

韓国国立子ども青少年図書館との交流事業

1. 韓国国立子ども青少年図書館との業務交流 = 網野 美美 23

2. 小展示交流「韓国の子どものたちのお気に入りの本—韓国国立  
子ども青少年図書館が選んだ子どもの本」 = 児童サービス課 24

「読書人の国を造る」ことを目指す人たち—ローマ・ミラノ出張報告  
= 小林 直子 26

【調査・研究報告】

タイの子どもの本事情 = 竹内 より子 28

イスラエルの児童書 = 母袋 夏生 33

【活動報告】 38

【数字で見る！国際子ども図書館】 48

【これから…】 53

【国際子ども図書館利用案内】 54

## 展示会「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」

### 1. はじめに

国際子ども図書館では2009年7月18日(土)から2010年2月7日(日)まで、3階「本のミュージアム」において、「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」を開催した。当館で所蔵している資料を中心に、鉄道博物館から借用した資料を含めて合計約250点を展示した。

資料を選ぶに当たっては、博物館や技術館とは違った、図書館が行う乗り物の展示であることを考え、乗り物そのものを扱った本だけでなく、絵本や文学作品などもバランス良く展示できるように構成した。また、乗り物は子どもたちに人気のある分野のため、長年子どもたちに読み継がれてきた本を多く選んだ。展示の仕方としては、過去の展示会のアンケートで寄せられた

「展示数が多すぎて見にくい」、「解説パネルの文字が小さくて読みにくい」などといった意見を考慮すると同時に、子どもたちにも楽しんでもらえる展示とするために、展示冊数のある程度絞り込み、解説パネルも小学校高学年が理解できるよう分かりやすく読みやすい内容を心掛けた。

企画に当たっては、財団法人交通文化振興財団専任学芸員(当時)の佐藤美知郎氏に監修をお願いした。展示リストは国際子ども図書館ホームページに掲載している。

### 2. 展示構成

メインテーマとして、鉄道・船・自動車・飛行機の4種類を取り上げた。それぞれの乗り物コーナーの中では、初めに歴史や歩みを紹介した後、鉄道なら駅、船なら冒険など、乗り物ごとに特徴的な切り口から児童書を展示した。各乗り物の最後には、その乗り物と関係の深い作家たちのコーナーを設けた。

鉄道コーナーでは、蒸気機関車・路面電車・地下鉄・新幹線に分け、歴史を解説している本や乗り物が主人公になっている絵本・物語などを展示した。また、『やこうれっしゃ』では昔の上野駅の絵を展示し、子どもが鉄道で旅をする『こんとあき』なども取り上げた。展示会場外壁には、『ふたごのでんしゃ』に登場する、廃



展示会ポスター



展示会場タペストリー  
『ふたごのでんしゃ』(堀内誠一絵) p.84-85の挿絵

絵本『えんふねにのって』、みんなでわいわい船に乗る『ガンピーさんのふなあそび』などを展示した。

自動車コーナーでは、発明されたころの自動車、大量生産されて身近になった自動車などの歴史のほか、交通事故の増加や環境問題、自動車のリサイクルといった社会問題を扱った本も取り上げた。『車のいろは空のいろ』や『しょうぼうじどうしゃじぶた』、『ぐりとぐら』など楽しい本も好評であった。『指輪物語』で知られる J.R.R. トールキンが自ら絵を描いた『ブリスさん』も展示した。

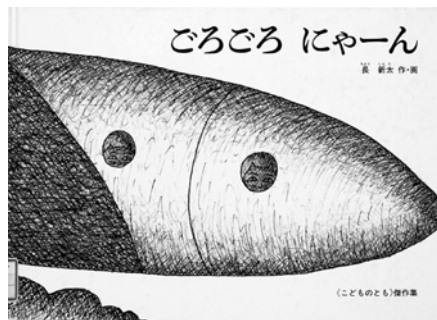
飛行機コーナーでは、古代ギリシアのイカロス、飛ぶことを夢見たレオナルド・ダ・ビンチなどの人たち、初めて飛行機で飛んだライト兄弟、ジェット機や気球、飛行船などの本、『ごろごろにやーん』といった空想の飛行機の本も展示した。飛行機を愛した作家として、サン＝テグジュペリやロアルド・ダールなどの本も紹介した。

特別コーナーでは、メインテーマで扱わなかった様々なテーマでの展示を行った。旧交通博物館のしおり、修学旅行列車のプレートや修学旅行のしおり、しかけ絵本、鉄道唱歌の楽譜や木村定男など乗り物画家が描いた乗り物絵本、自転車、宇宙。あの世とこの世をつなぐ乗り物コーナーでは、三途の川を渡る舟、幽霊船など、魔法の乗り物では、『魔女の宅急便』をはじめとする魔法のじゅうたんやほうきを展示し、乗り物の本の多様さを伝えるコーナーとなった。

本以外にも鉄道博物館から借用した、1号機関車(日本で初めて走った蒸気機関車)と1903年式 A 型フォード(フォード社が初めて製造したモデル)の模型を展

止になった路面電車を「こどもとしゃかん」として再生した場面をタペストリーとして飾った。

長い歴史をもつ船のコーナーでは、紀元前の丸木舟から大航海時代の帆船、産業革命後の汽船などを紹介した。『宝島』などの冒険物や、働く船を描いた『しょうぼうていしゅつどうせよ』、幼稚園に船に乗って通園するという



ごろごろにやーん 長新太 作・画 福音館書店 1984



示し、来場者の関心を集めていた。1号機関車は『きかんしゃやえもん』のモデルにもなり、実物は鉄道博物館に展示されている。また、東海道新幹線開業ポスターや安井小弥太が描いた飛行船の絵の複製パネルも展示した。

### 3. 関連催物

展示会に関連した講演会として、監修者佐藤美知男氏による「子どもと『のりもの』—かつての交通博物館での活動を通して」を展示会初日の7月18日に、乗り物絵本研究家の関田克孝氏による「乗り物絵本の歴史と魅力」を10月4日(日)に行った。職員によるギャラリートークは8月9日(日)と11月15日(日)に行った。



7月18日の講演会

また、夏休み期間中には「のりものスタンプラリー」を行った。展示会場を含む館内をまわってスタンプを集めると、乗り物の絵が付いたしおりをもらえるという企画で、多くの子どもたちがスタンプラリーを楽しみ、図書館に親しむきっかけとなった。

### 4. 終わりに

来場者アンケートでは、「多すぎず少なすぎず適度な量だった」、「短い説明が良かった」など好意的な反応が多く見られた反面、「冊数が少ない」、「もう少し解説が欲しかった」という意見も散見され、物足りなく感じた人もいたようである。

「展示した本の中で興味を持ったもの」としては、新幹線の本に根強い人気があったほか、『ぐりとぐら』、『こんとあき』などが挙げられていた。今回は「タイトルをみただけでは分からないが、実は乗り物の出てくる本」を各コーナーで選んでみたが、狙い通り意外感を与えることができたようだ。

子ども向けのアンケートでも、「いろいろな本があったのしかった」という意見が多く寄せられ、子どもたちに楽しんでもらえたようである。大人からも「子どもの頃に読んで好きだった本があったうれしかった」、「もう一度読みたいと思った」、「乗り物をテーマにブックトークをやりたくなった」といった感想が寄せられ、大人も子どもも楽しんでもらえる展示会として成果を上げたのではないかと考えている。

(「出発進行! 『のりもの』本めぐりへ」展示班)

# 展示会「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」に寄せて —鉄道博物館からの資料

佐藤 美知男

「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」展では、本に加えて、乗り物の模型や修学旅行の資料、交通博物館が作った教材などを参考として展示した。これらの資料について、簡単に解説しておきたい。

交通博物館は1921年に、鉄道博物館という名前で東京駅北側に開館した。1936年に神田須田町に移り、太平洋戦争の空襲が激しくなった1945年に一旦休館する。1946年に交通文化博物館として再開し、1948年には交通博物館と改めた。陸海空の交通の総合博物館として活動してきたが、2006年に閉館し、翌2007年に鉄道博物館がさいたま市に開館した。交通博物館の資料は、一部を除いて鉄道博物館が引き継いだ。

## 交通社会科のしおり

終戦直後は東京でも博物館施設が少なく、交通博物館も交通の分野に限らず、広く子どもの教育の拠点になっていた。

活動の一つとして、1950年から『交通社会科のしおり』（のちに『交通理科社会科のしおり』）を発行し始めた。これは交通博物館の館内案内や、乗り物の歴史や仕組みについて、色刷りの絵入りで解説した折りたたみ式の印刷物である。このような印刷物が少なかった時代であり、1冊10円と買いやすかったので人気となり、1961年までに12種類を発行した。その後、『交通学習ガイドシリーズ』と題名を改め、内容も体裁も新しくして、昭和40年代まで発行した。

## 交通の宿題教室

交通博物館では1965年から毎年8月に「夏休み宿題教室」を開催した。当時、外部からの交通関係の問い合わせに応じる交通知識相談室という専門の窓口があった。また、館内の図書室は毎週日曜日と祝日に公開していた。図書室には子ども向けの図鑑や百科事典も置いたが、交通関係の専門書、歴史書、年鑑、雑誌などが多く、利用者も学生や大人が主であった。

「夏休み宿題教室」は夏休み時期に学校の宿題や自由研究の問い合わせが増えるので、そのために特設した相談コーナーである。問い合わせの中で、乗り物ナンバーワンやバストン、簡単な歴史などはよくある質問なので、それらの解説や参考になるいろいろなデータをまとめた『交通の宿題教室』という冊子を1967年に作成し、販売した。題名はのちに『交通の Q&A』と改めている。

「夏休み宿題教室」は、学習内容や形態が変化して次第に利用者が減った昭和50年代後半からは縮小し、夏休み中の図書室公開日を増やして対応した。

## 修学旅行のしおり

修学旅行は明治時代に始まった。戦前は伊勢や奈良・京都が多く、学校によっては船を使ったり、各地を周遊する長期間の行程もあった。今は行く先や見学先が多様化していて、海外も珍しくないが、それでも奈良・京都や東京では、修学旅行生をよく見かける。

修学旅行は学校教育の一部なので、出発のときから学習である。目的地の見学だけでなく、途中の沿線も車窓から観察することになっている。

私は「ひので」号で関西に修学旅行をした世代である。すでに東海道新幹線が開業していたが、在来線の東海道本線で行った。配られた教材は『東京から関西へ』という題名の冊子で、車窓から見える山や川などの自然環境や地形、農地の作物の様子、主な工場や町の姿などを説明した第1編と、目的地である関西地方の寺社や名所を解説した第2編の二部構成であった。本文内の地図には、東海道本線が新幹線や他の鉄道と立体交差する場所なども出ていた。交通に興味があった私は、初めて見る知らない鉄道が珍しく、車窓からそればかり探していた。

## 1号機関車模型

1872年に日本で初めて鉄道が開業したときに走った蒸気機関車の15分の1の模型で、イギリスから10両輸入したうちの第1号になった機関車である。1号機関車は国鉄での仕事を終えた後、明治時代の末に九州の島原鉄道に売られたが、大事な機関車なので国鉄に戻り、1936年から交通博物館（当時は鉄道博物館）で保存していた。国鉄・JRの鉄道記念物と、国の重要文化財に指定され、今は鉄道博物館で保存している。阿川弘之さんが書かれた童話『きかんしゃやえもん』は、この1号機関車の話をモデルにしたものである。

## フォード A 型自動車模型

この展示会では昔の自動車の一

例として展示した。交通博物館時代に、初期の自動車の歴史を展示するために製作した模型の1台で、大きさは8分の1である。

フォードは「自動車王」として伝記にもしばしば登場する。フォード A 型は、フォードが自分の会社を興した1903年に初めて造った自動車である。1台850ドルで、約1,700台が売れた。1908年からはフォード T 型を大量生産で安く造り、自動車を世界に広めた。

(さとう みちお 鉄道博物館客員学芸員)



(左) 修学旅行案内と列車に掛けた札  
(右) 交通博物館で発行した印刷物



(左) フォード A 型自動車模型  
(右) 1号機関車模型

## 展示会「ゆめいろのパレットⅣー野間国際絵本原画コンクール 入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」

はじめに

国際子ども図書館では2009年3月14日(土)から7月5日(日)まで、3階「本のミュージアム」において、財団法人ユネスコ・アジア文化センター(以下、ACCU)との共催により展示会「ゆめいろのパレットⅣー野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」を開催した。野間国際絵本原画コンクールは、1978年に始まり、出版の機会に恵まれないアジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域における絵本作家の活動を奨励するために隔年で開催している。当館では展示会「ゆめいろのパレット」を、2003年から開催しており、4回目に当たる今回は、第16回野間国際絵本原画コンクール入賞作全33作品から選んだ原画68枚と、絵本及び関連書166冊を展示し、絵本の原画という芸術作品とともに、ふだん目にする事の少ないアジアやアフリカ、ラテンアメリカの絵本を紹介した。

展示内容

今回の大賞はコスタリカのウェン・シュウ氏による「ナディとシャオ・ラン」であった。異なる文化的背景を持つ子どもの交流を描いた作品で、技法の面でも、中央アメリカの伝統的な手芸であるモラと中国の切り絵の手法が組み合わされている。

次席受賞作は、イランのフェレシュテ・ナジャフィ氏の「王女」と、スーダンのアラエルディン・エルジズーリ・ナウム氏の「昼でも夜でもない時間」であった。

原画とともに、モラやコスタリカの紹介資料、過去の大賞、次席受賞者の絵本も展示した。



大賞 「ナディとシャオ・ラン」  
ウェン・シュウ



次席 「王女」  
フェレシュテ・ナジャフィ



次席 「昼でも夜でもない時間」  
アラエルディン・エルジズーリ・ナイム

佳作受賞作10点、奨励賞受賞作20点の原画は、それぞれ地域別に展示した。そのほか、ACCUの活動を紹介する資料や、過去の佳作・奨励賞受賞者の絵本やその周辺の国々の絵本69冊を、アジア、中東、オセアニア・アフリカ、ラテンアメリカの4地域に分け展示した。

さらに、今回の受賞作のうち、すでに絵本として出版されている8点を展示した。

#### 関連催物

関連行事として、4月25日(土)に翻訳家の神戸万知(ごうどまち)氏による講演会「ラテンアメリカと子どもの本」を開催した。あいにくの悪天候であったが47名の参加があり、講演後の質疑応答では、紹介された本の翻訳出版に対する要望等もあった。

また、当館職員によるギャラリートークを、3月22日(日)に行った。

なお、3月13日(金)に、大賞受賞者ウエン・シユウ氏、次席受賞者アラエルディン・エルジズーリ・ナイム氏を含めた関係者を招き、開会式及びテープカットを行った。

#### アンケート結果

展示会の印象については、「絵本の原画の美しさに驚いた」、「ふだん目にすることの少ない国々の作家による斬新な表現」、「世界中の絵本のすばらしさ」等の感想が寄せられた。展示した絵本の入手方法に関する問い合わせや、入賞作品が出版につながることへの要望・期待も寄せられ、原画や様々な国の絵本に対する関心の高さが感じられた。

(「ゆめいろのパレットⅣ」展示班)

## 世界をつなぐ子どもの本一

### 2008年度国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展

2009年8月22日(土)から9月27日(日)まで、国際子ども図書館3階ホールにおいて、昨年に引き続き、スイスに本部を置く国際児童図書評議会 (IBBY) の日本支部である社団法人日本国際児童図書評議会 (JBBY) と国際子ども図書館の共催で展示会を開催した。今回の展示会では、2008年の国際アンデルセン賞受賞者の作品13冊と、58の国・地域から選ばれた IBBY オナーリスト受賞図書と邦訳書211冊を展示した。

国際アンデルセン賞は、児童文学の分野で卓越した業績をあげた現存の作家及び画家に贈られる。2008年はスイスのユルク・シュービガーが作家賞を、イタリアのロベルト・インノチェンティが画家賞を受賞した。

IBBY オナーリスト賞は、IBBY 各国支部が過去3年以内に自国で出版された児童書の中から、外国に紹介したい「文学作品」、「イラストレーション作品」、「翻訳作品」を選び表彰するもので、2008年は日本からは、高樓方子の『おともだちにナリマ小』、荒井良二の『たいようオルガン』、千葉茂樹の『おりの中の秘密』が選ばれた。

昨年同様、会場内に設置したベンチでゆっくり資料を見る入場者が多く、アンケートでも、ふだん目にする事の少ない世界各国の子どもの本を一度に、じっくり手に取って見ることができてよかったなど、この展示会の特色を高く評価する感想が多数寄せられた。また、今回の展示会では、外国語資料に日本語によるあらすじを付けて展示したが、内容が分かりやすかったなど、大変好評であった。この展示会は、世界中から選ばれた新刊書を一覧できる貴重な機会となっており、JBBY と協力して今後も継続的に取り組んでいきたい。

関連企画として、1階の「世界を知るへや」で、これまでの日本人受賞者の作品32冊の小展示を行った。

(「世界をつなぐ子どもの本」展示班)



## 本の城一本と子どもと大人をつなぐ場所

ガンツェンミュラー 文子

### 先駆的なレップマンの図書館づくり

ミュンヘン国際児童図書館（IJB）の創設は第2次世界大戦直後の“米軍占領地区における婦人・青少年のための再教育プログラム”と切り離せない関係があるが、アドバイザーの任務を受けたユダヤ系ドイツ人の女性ジャーナリスト、イエラ・レップマンの存在があってこそ実現され得た。亡命先のロンドンから祖国に戻り、具体案の浮かばぬまま、焦土となったドイツを視察し、各地で政治家や知識人、一般市民、子どもたちと言葉を交わし、敗戦後のドイツの混乱した社会的、精神的状況をまず把握した。そして“国の再建には確固とした支えとなるものが必要、そのためにはまず第一に、子どもたちに目を向け、将来、彼らが新しい民主的なドイツを築くための教養を与えなければならない”と確信し、米軍司令部に国際児童図書館の必要性を提言した。その案は承諾されたが、予算がなく、1945年末より、各国出版社への熱心な献本依頼が始まる。ナチに侵略された国からは拒絶されたが、“だからこそ、子どもの本を通して国際理解をはかり、寛容と民主主義を学んで貰い、民族の平和的共存を願う。この戦争に対して子どもには罪がない。むしろ子どもの本は最初の平和の使者となるべき”と説得した。レップマンはまた、自由世界の本はドイツの教育者や出版社にとってもオリエンテーションになると期待した。その熱意と理念は受け入れられ、20か国から約4,000冊が集まり、1946年7月、ミュンヘンを皮切りに合計7都市で巡回展示された。多くの都市が爆撃で破壊され、瓦礫の山も片付けられず、生活も困窮していた時期に児童書に着眼し、展示会を敢行したことは驚嘆に値する。反響は大きく、百万人以上の人が訪れた。

レップマンが米軍の軍服を着て、展示会実現へと奔走し、その後、国際児童図書館を設立するまでの過程は自伝的記録“Die Kinderbuchbrücke”（邦訳『子どもの本は世界の架け橋』2002年こぐま社刊）に臨場感を伴って書かれていて、読む者を感動させるが、開館後の50年代の記述もまた、そこに高名な作家や哲学者、政治家などが登場し、いかに彼らがレップマンの理念、未来への希望を分かち合い、共に活躍したかが分かり、興味が尽きない。ルーズヴェルト米大統領夫人やホイス西独大統領も来訪した。エーリヒ・ケストナーや劇作家カール・ツックマイアーは最も親しい友人となって、子どもが自ら創造的、民主的に人格形成が成せるよう、また、その権利があることを自覚させるべく、図書館活動に加勢した。

ケストナーは自作朗読や、本の討論会をし、演劇グループも結成した。時には、彼やエリカ・マン等とのインタビューも行われ、バイエルン放送の子ども番組で放送された（写真1）。若い“批評家”は書評を書くことで、批評力、表現力を磨いたが、そうした“新情報”は焚書の行われた苦い時代の後の出版社も参考にした。

レップマンは図書館が自由に青少年の自己発展へと結び付く空間であってほしいと、絵画教室、外国語教室、人形劇グループを設け、青少年国際連合も発足させた。“各国の代表者たち”は蔵書を利用した調べ学習の後、“自国”の特徴、状況、問題点を発表し、議論し合った。財政面で図書館存続の危機に何度も遭った



写真1 エーリヒ・ケストナーと子どものラジオ番組  
© Internationale Jugendbibliothek

が、政界人、文化人の支援を求め、また、講演会や子どもの本の国際会議等の実施を通して、児童文学や図書館の意義を世にアピールした。世界組織の国際児童図書評議会（IBBY）も創設している。

IJB は設立60周年の2008年にミュンヘン市文化センターで、設立前後の回顧展を行い、当初から支援を惜しまなかった市議会議員、後に大臣、更にドイツ連邦大統領の候補者ともなったハム・ブリュッヒャー女史と、IJB ラーベ現館長との公開対談を催した。また、かつての子ども利用者だった方々にも、壇上で体験談を披露していただいた。ドイツで初の開架式閲覧室の床に座り込んで読書に没頭し、“届いた新刊書の包みを館員と開ける事が許されれば、金を発掘する如くに胸を躍らせ”たり、“夏の夕立にあった時のように、未知の本や作家名に驚きと新鮮な気分を味わった”と語り、“図書館の活動が豊かな子ども時代をもたらして、その後の職業選択にも影響した”という言葉もあった。レップマンは1957年に引退し、余生をチューリッヒで送った。ちなみにその前々年、故石井桃子氏がロックフェラー財団の奨学金を得て、図書館に長期滞在されている。

### 現在の多面的、実験的な活動

その後 IJB は児童文学専門図書館として大きく発展し、1983年にブルーテンブルク城に移転した。研究図書室が設置され、外国からの児童文学関係者も多く訪れる。90年代からミヒヤエル・エンデ、ジェイムス・クリュス、ビネッテ・シュレーダーのミュージアムも併設された。現在の蔵書数はほぼ60万冊、130言語に至る。そのうち、13言語25,000冊を一般貸出ししている。運営はドイツ連邦政府、バイエルン政府、ミュンヘン市よりの公金で、図書収集は各国出版社の献本協力による。連邦政府外務省は IJB 奨学金制度の費用を担い、毎年12人の外国人児童文学研究者が招致されている。



IJB のプロジェクト、読書推進活動は多様で、関連行事を伴った各種展示会やシンポジウム、講演会、作家の朗読会、画家とのワークショップ等。行事にはホールや貸出室、絵画アトリエ、塔、回廊、中庭等をフルに活用する。例えばロビンソン・クルーソーとロビンソナーデをテーマにした「陸は見えぬ」展のファミリープログラムでは、無人島で生き延びる主人公の追体験として、中庭では子どもたちが草や木で小屋を建て、土器を作り、絵画アトリエでは自分で物語の断片を生み出し、あるいは絵で物語を試みがなされた(写真2)。また、エリック・カール生誕80年記念展示会には「はらぺこあおむし」の変身遊びや工作、原本、翻訳版の読み比べ等にぎわった。



写真2 ロビンソン・クルーソー展 学校プログラム ワークショップ © 筆者撮影



写真3 画家ラインハルト・ミヒルとのワークショップ 学校プログラム  
© Internationale Jugendbibliothek

「学校プログラム」はクラス単位の生徒が展示会、小展示、あるいはミュージアムを見学した後、絵画アトリエでフリーの専門家の指導で行われるワークショップで、文学、美術、情操教育の一環とみなされ、定評がある。作家や画家が直接受け持つときもある(写真3)。

そうした形のアプローチとは別に、レップマンの理念“児童書を通して国際理解を”を受け継ぎ、未知なるものへの興味と、自分とは違う他者への敬意、寛容の精神等が養われる本を巡回展示会にして国内外に仲介している(写真4)。

その一つは目下、

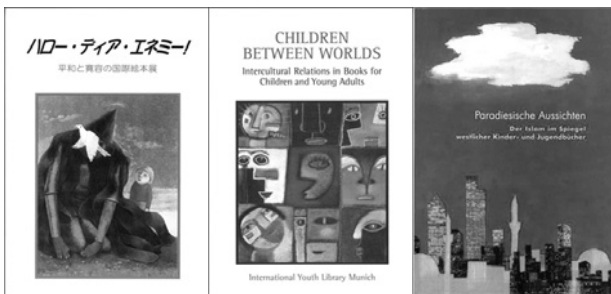


写真4 平和と寛容をテーマにした巡回展示会目録3種  
© 筆者撮影

日本国際児童図書評議会が主催し、紙芝居文化の会の協力も得て、あらたに日本の各地を回っている「ハロー・ディア・エネミー! 平和と寛容の国際絵本展」(80作品展)、多文化社会における人種差

別、疎外、融合、アイデンティティーの問題を扱う「異文化圏の子どもたち」、最新の例はイスラム教とキリスト教世界の邂逅と、そこから生じる問題、理想的な融合の可能性を問う「楽園への展望」が挙げられる。イスラムの伝統とヨーロッパの自由主義的な思考と生活様式の狭間で生きる、イスラム圏からの移民家庭出身の子どもや若者が主人公の児童文学、ヤングアダルト書、知識の本を紹介している。社会的、政治的、時事的要素が強い「楽園への展望」には学校プログラムのほかに、教師対象に図書紹介の研修会が提供され、また、インターカルチュラルなコミュニケーションを求めて活躍する、アルジェリア系フランス人作家のアズーズ・ベガグを招き、中高校生や大人対象に講演会を行った。

現在、新しいプロジェクトが学校と IJB と他機関との連携で実験的に試みられている。一つは生徒がダッハウ強制収容所記念館を見学し、囚人の手記なども読んだ後に、レップマンが創設した図書館に移り、静かな環境の中で各人見聞したこと、思うことを、ナチに関わる児童書を手掛けた編集者の指導で記事にまとめる。このプロジェクトの思想はドイツ人がよく口にする“過去の克服”。ナチの政治的犯罪行為を明らかにし、いずれ社会の成員となる青少年たちに、その歴史的事実と将来彼らが継ぐ責任問題を意識させることにあるが、未来に起こり得る戦争への予防策でもある。かつてヴァイツゼッカー元大統領が演説の中で「過去に目を閉ざす者は、結局現在にも盲目となる」と述べたように。

この歴史教育につながるプロジェクトの他に、IJB が毎年刊行する国際推薦児童図書展目録「The White Ravens」が国語の授業に利用されている。ポーニアのブックフェアの IJB ブースでは選書した各国の新、近刊書を展示するが、その目録からドイツ語圏の図書を選び、生徒に読ませ、評価させる。それを目録解題と比較させ、最終的に批評を書かせる。優れた児童書が読まれると同時に、読書力、批評眼、表現能力が育成される。批評は学校のホームページで公開され、生徒の喜びと誇りともなった。

2009年に行われた開館60周年記念展示会の「詩とイラストレーション展」には各国のアンソロジーから詩文とその絵画的解釈が優れている例を紹介し、芸術性が前面に出た美しい展示会になった。日本の作品も訳と朗読を加えて出展された。児童文学関係者対象の「国際作家（詩人）画家フォーラム」では、詩の本の出版上の難点について、出版者や編集者も経験や意見を述べた。ファミリープログラムの各ワークショップでは子どもたちが詩作や詩画、カリグラフィーを試み、演劇俳優の指導で詩を身体表現して“体験”する遊びに挑戦した。

私がこれまで IJB で経験したことを振り返ると、本は知識と想像と生きるための力の源であることを改めて感じる。仲介と活動を通して生き生きとした翼を得て、より広い世界へ、より多くの人のもとへ飛び立つ。日本部門のレファレンスをするときも、狭い範囲にとどまらず、児童書が様々な領域で役立つ経験もした。

(がんつえんみゆらー ふみこ ミュンヘン国際児童図書館日本部門嘱託)

## 平成21年度児童サービス連絡会 —公共図書館への支援の実際と課題—

国際子ども図書館では平成19年度から「児童サービス連絡会」を開催し、都道府県立図書館の児童サービス実務担当者との情報交換を行ってきた。

平成19年度は「児童サービスの実際と課題」、平成20年度は「学校図書館への支援の実際と課題」、そして最後の年に当たる平成21年度は「公共図書館への支援の実際と課題」をテーマとした。

児童サービス関連で活発に活動し、広域のかつ館種をこえた支援を行っている都道府県立図書館の中から、地域的な偏りがないよう考慮した結果、次の9館に3年連続での参加を依頼した。



参加館：(館名五十音順)

石川県立図書館\*、大阪府立中央図書館、岐阜県図書館、群馬県立図書館、東京都立多摩図書館、徳島県立図書館、福岡県立図書館、福島県立図書館、山口県立山口図書館

\*今年度は欠席

2009年10月21日(水)に開催した「平成21年度児童サービス連絡会」では、今回のテーマに関して参加館に実施した事前アンケートに基づき、報告や議論がなされた。

各館の活動状況や課題などに関する意見交換のうち、主だったものを紹介する。

### <協力貸出しについて>

一般的な協力貸出し以外の、特徴のあるセット貸出しについての報告があった。

- ・ 市町村立図書館での展示用として「しかけ絵本」や「外国絵本」をセットにして貸し出している。すぐに展示できるよう、キャプションを付けたもので、府内の図書館員が集まる司書セミナーで紹介したところ、借りるところが出てきた。(大阪)

- ・ バリアフリー絵本セットや物語（「ももたろう」「三匹のこぶた」など）の読み比べセットを複本で作り、貸し出している。後者については、解題などは付していないが、市町村の読書グループ等が勉強用によく利用している。（福島）

#### <協力レファレンスについて>

ストーリーレファレンスや子どもの読書に関する相談が多く寄せられるという館が多かった。

- ・ 複数のブックリストで取り上げられている本を一覧できるようにしている。子どもに何を読ませたらよいかという問い合わせがあった際には、対象年齢なども考慮して、その中から勧める形で回答している。（山口）

#### <図書館運営に関する相談について>

研修、講演会の講師紹介の相談が目立つという館が多かった。

- ・ 講師紹介の相談には、講師と講義内容を記載した「図書館講師一覧」を作成し、対応している。（岐阜）
- ・ 読み聞かせやブックトークの実践についての講師派遣や紹介が多い。（福島）
- ・ コンサルティングができる職員の育成、確保が難しい。講師紹介の相談対応はベテラン職員に頼らざるを得ない。次世代の育成が課題である。（東京）

#### <市区町村立図書館員向けに行っている研修・講座・講演会について>

市区町村立図書館で委託が進んだことにより正規職員が減り、少人数職場となったため、研修に参加しづらくなったという声がある一方、業務委託先の社員にも研修の参加を認めているという館もあった。初任者研修は、県立図書館による実施、県の図書館協会による実施、県のレベルでは実施しないなど取り組み方が分かれた。

- ・ 市町村から、県立図書館で行う研修に旅費不足で参加できないという声がある。県内各地に出向いての研修会を検討する必要がある。（福島）
- ・ 参加しやすさを考え、休館日である月曜日に研修を行っているが、公務としてではなく、休みを取って来なければならない人がいる。（福岡）
- ・ 町村合併の影響で自治体数が減少したため、各自治体から1人参加できるという研修では参加できる人が少なくなりました。（山口）
- ・ 初任者研修を実施しており、多くの参加を得ている。これは一方では人事異動等で、毎年初任者が大量に生じるということでもあり、スキルの継承につなげにくいという状況もある。（東京）

#### <障害のある子どもへのサービスについて>

参加館が属する自治体の「子どもの読書活動推進計画」に、障害のある子どもへのサービスが取り上げられていたことから、サービスの進め方についても、情報交

換を行った。

- ・ 児童担当と障害者サービス担当と協力してやっている。(大阪)
- ・ 手話のおはなし会を実施している。特別支援学校でおはなし会を行っているが、都立多摩図書館だけですべての特別支援学校を回れるわけではないので、今後のサービスをどうするかが課題である。(東京)
- ・ 障害のある子どもたちへのサービスは、特別支援学校の先生と相談して行っている。具体的には特別支援学校用セットの貸出し、出前おはなし会、移動図書館等である。いずれおはなし会は、地域のボランティアの人に引き継ぎたいと思っている。(福島)
- ・ 特別支援学級を対象にした来館おはなし会があるが、先生と相談し、通常のスタイルで行っている。ボランティア支援事業の一環として、ボランティア団体が作った布絵本を特別支援学校に貸し出し、ボランティア団体と使われ方を見学した。(福岡)

#### <情報通信技術を使った連携について>

県内 OPAC の横断検索のほか、メーリングリストや掲示板などを活用している館が多かった。メーリングリストや掲示板をお知らせに使用しているだけでなく、レファレンスの回答を流したり、情報交換の場として利用している館もあった。

- ・ 公共図書館協議会のメーリングリストを市町村へのお知らせに使っている。一つの図書館に対する質問でも、メーリングリストに回答を出すことにより、情報共有できる。(岐阜)
- ・ メーリングリストには、「こんな時、どうしているか?」といった実務的な質問と回答のほか、研修の案内なども掲載している。(大阪)
- ・ 県内全図書館のイベント情報が見られるページを作った。(岐阜)
- ・ 「E協力メールマガジン」を図書館長連絡会メンバーである市区町村の図書館長あてに送っている。内容は都立図書館からのお知らせや図書館関連記事である。館長から各担当者にも情報はよく伝わっているようである。(東京)

#### <子どもの読書に関する情報発信について>

ブックリストの作成が最も多く、次いで児童書研究や児童サービスの活動を報告するニュースレターの発行が多かった。児童サービス担当者の交流イベントの事例も挙げた。

- ・ 図書館員の勉強も兼ねて県内の公共図書館の児童担当者と共に「図書館員がすすめる子どもの本」を作成した。読書相談を受けた際には、これを手始めに使っている。公共図書館と学校図書館に配布したが、コピー自由とし、読書案内や展示の際の配布資料として各館で活用している。(群馬)
- ・ 「東京都公立図書館児童サービス担当者会」という集まりを毎年行っている。

位置付けは事務的な連絡会だが、情報交換・情報提供の場としたいと考えている。テーマを決めた事前アンケートを都内の図書館に行き、先進事例には発表をお願いするなどしている。参加館にとって課題となっていることをテーマとし、研修的な意味合いも持たせている。平成21年度のテーマは「子どもへの郷土資料の提供」とした。(東京)

### <その他>

市区町村立図書館から参加館へ寄せられる要望としては、資料の提供・保存を充実させること、情報提供、研修などによる人材育成支援などが多いとのことだった。初任者研修は県立図書館が実施するのではなく、各自治体で実施できるようにしていきたいが、各図書館の人事異動が頻繁なため困難であるという声も聞かれた。

参加館から当館への要望としては、情報提供、遠隔研修、資料の貸出し、児童書に特化したレファレンスデータベースの作成などが出された。

計3回の「児童サービス連絡会」では、広範囲にわたる各図書館のサービスの実情と課題をお互いに共有することができた。会議の場で得た情報をヒントに、新たなサービスを始めた館があるなど、具体的成果につながっている。

なお連絡会では、討議内容の公表をもって、参加館以外の都道府県立図書館の児童サービスに係る図書館活動を支援することも目指している。過去2回の報告は本誌8号(2008年3月刊)、9号(2009年3月刊)にすでに掲載しており、当館のホームページでも見ることができる。

また、事前アンケートの結果も当館ホームページで公開している。この資料では参加館の児童サービスの実際や、実務を行っていく上での課題が一览できるので、有効活用していただければ幸いである。

#### 平成19年度事前アンケート結果

<http://www.kodomo.go.jp/event/evt/bnum/event2008-04.html>

#### 平成20年度事前アンケート結果

<http://www.kodomo.go.jp/event/evt/bnum/event2009-04.html>

#### 平成21年度事前アンケート結果

<http://www.kodomo.go.jp/event/evt/bnum/event2009-10.html>

なお、当館で平成21年度内に策定する「子どもの読書活動推進支援計画」は、この会議の成果を十分生かしたものとしていきたい。

(児童サービス課)

## 児童文学連続講座「いつ、何と出会うか ー赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」

2009年11月9日(月)と10日(火)の2日間、国際子ども図書館において、第6回目の「国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座ー国際子ども図書館所蔵資料を使って」を開催した。この講座は、当館が広く収集してきた内外の児童書及び関連書を活用し、全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員の資質向上と幅広い知識のかん養に役立てることを目的としている。今回は全国28都道府県の公共・学校・専門図書館等から67名が受講した。



### <講義内容>

- |                                |                        |
|--------------------------------|------------------------|
| ・「赤ちゃん絵本ー赤ちゃんは音を食べる」           | 後路 好章氏 (元アリス館編集長)      |
| ・「幼年童話」                        | 宮川 健郎氏 (武蔵野大学教授)       |
| ・「紙芝居・共感の楽しさ素晴らしさ」             | 酒井 京子氏 (童心社会長)         |
| ・「ヤングアダルト文学」                   | 石井 直人氏 (白百合女子大学教授)     |
| ・「参考図書紹介『子どもの本のブックリスト』のブックリスト」 | 石渡 裕子 (国際子ども図書館資料情報課長) |

今年度は宮川健郎氏(国立国会図書館客員調査員、武蔵野大学文学部教授)の監修により、総合テーマを「いつ、何と出会うかー赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」として、赤ちゃん絵本、幼年童話、紙芝居、ヤングアダルト文学について、各講師がその特徴を紹介した。あわせて、当館所蔵の子どもの本のブックリストについての講義を国際子ども図書館職員が行った。各講義で紹介された当館所蔵資料を受講生が手にとって閲覧できる時間を設けたほか、館内見学も実施した。また、「図書館で作成するブックリストの作成ポイント」及び「対象(乳幼児、小学生、ヤングアダルト)によるアプローチの工夫」をテーマとして、初の試みとなるグループ討論を取り入れ、研修生意見交換会を行った。

当日配布資料及び前年度講義録「日本の昔話」のPDF版は下記のとおり国際子ども図書館ホームページで公開している。今年度連続講座の講義録は平成22年度に刊行予定である。

- ・当日配布資料 <http://www.kodomo.go.jp/event/evt/bnum/event2009-03.html>
- ・平成20年度講義録 <http://www.kodomo.go.jp/event/text/index.html>

(企画協力課協力係)

# いつ、何と出会うか

## —平成21年度児童文学連続講座の2日間—

宮川 健郎

### 「赤ちゃん絵本」と「ヤングアダルト文学」

全国の図書館で児童サービスの仕事をしている方たちを対象に行われてきた国際子ども図書館児童文学連続講座も、今年度で6回目を迎えた。

毎回の講座が終わったとき、参加者にアンケート調査をして、今後、聞きたいテーマを尋ねてきたけれど、しばらく前から希望が多いのが「赤ちゃん絵本」と「ヤングアダルト文学」に関する講義だった。「赤ちゃん絵本」と「ヤングアダルト文学」では、児童資料としての形式も内容もかけ離れている。一緒に扱うことはできないのではないかと。それでも、このアンケート結果からは、お父さん、お母さんと一緒にの乳児、幼児から、中学・高校生まで、様々な年齢層の子どもたちが、図書館の児童書コーナーや児童室を訪れる様子が浮かび上がってくる。最近では、YA（ヤングアダルト）の書棚を設ける図書館も増えてきたようだ。

図書館を利用する子ども読者の側から考えることにすれば、「赤ちゃん絵本」と「ヤングアダルト文学」を同じ講座の中で取り上げることもできるのではないかと。これに、「幼年童話」と「紙芝居」の二つを加えた、全部で四つの領域にかかわる講義を用意することにした。総合テーマは、「いつ、何に出会うか」。図書館にやって来る、いろいろな子どもたちに、どんな本をどのように手渡したらよいかを、児童資料に即して考えようというわけである。「赤ちゃん絵本」の講義はあるけれど、「絵本」の講義はない。「幼年童話」や「ヤングアダルト文学」の講義はあるけれど、「児童文学」という講義はない。しかし、四つの領域を入口として、子どもたちが出会う本的全領域について考えていくことになるだろうとも思った。

### 読んであげる声

四つの領域の講義は、どれも、ほかの場所ではなかなか聞く機会のないものだったけれども、図書館の児童サービスにかかわる講座の中で紙芝居を取り上げたのは、もしかすると、独自の冒険だったかもしれない。紙芝居は、昔話や名作童話の再話が多い。その再話の在り方によっては、原作への橋渡しとしては不適切と考えられたりして、児童サービスの世界では敬遠される向きもある。それでも、多くの公共図書館で紙芝居は購入されているし、おはなし会などでも使われているだろう。

講師の酒井京子さんのお話では、紙芝居というメディアの特性と、その独自な力が具体的に語られた。「紙芝居は絵本と異なり、表に画・裏に文章が書かれています。そのバラバラの紙を紙芝居舞台に入れ、一枚一枚ぬきながらお話を進めていくという形式もっています。そのために、演じ手が必要であり、演じ手は観客と向き合って文章を読み進めていきます。(中略) 綴じられ・読者自身がページをめくりなが



らお話を楽しむ絵本とは、大きな違いがあります」(当日配布資料より)。酒井さんは、いくつかの紙芝居を見せたり、実際に演じたりしながら、講義をしてくださった。酒井さんが紙芝居を演じるとき、受講生たちは、観客になり、酒井さんの言う「集中とコミュニケーションによる共感」の世界へと投げ込まれていった。受講生たちは、観客として紙芝居を体験する中で、紙芝居の特性や歴史も、日本固有の児童文化財である紙芝居が海外に広がっている現状も学んだのだ。ここから、児童サービスの現場での紙芝居の生かし方が改めて発想されていくことだろう。

紙芝居を演じるのは、舞台から一枚一枚を抜いていく手と、裏に書かれている文章を読む声だけれど、この読んであげる声の問題は、赤ちゃん絵本や幼年童話の講義でも、取り上げられた。後路好章さんの赤ちゃん絵本の講義の副題は、「赤ちゃんは音を食べる」だった。絵本を読んであげると、赤ちゃんは、擬音語や擬態語などの音をまるで食べるように吸収するという。幼年童話について話したのは私だが、幼年童話のもつ「口誦性」(声に出して読めるという特質)ということを中心に考えていった。子どもに読んであげる声は、身体の続き、いや、身体そのものだろう。子どもも、その声を身体で受け止めているのだから、そこには、身体と身体の生々しい関係が生まれるはずだ。子どもに本を手渡すことの意味を、ここから考え直すことはできないか。

### 新しい試み

「いつ、何に出会うか」という総合テーマに合わせて、参考図書紹介の時間には、読者対象別、あるいはテーマ別の様々なブックリストが紹介された。そうしたブックリストの中には、各地の図書館が編纂したものも数多くある。参考図書紹介の後の意見交換会の話題には、このブックリストの問題も取り上げられたのである。今回の意見交換会は、グループ討議の形で行われた。これは、これまでの講座にはなかった新しい試みだ。

今回の講師のうち、後路好章さんと酒井京子さんは、児童書の制作に長く携わってきた編集者である。経験に即した、具体的で、たくさん考えるヒントのあるお話がうかがえたと思う。これも新しい。

講師による講義の最後は、石井直人さんの「ヤングアダルト文学」。石井さんは、YAの流れを、1983年に邦訳が刊行された、S.E.ヒントンの『非行少年』のことから語り始めた。講義の後には、石井さんと私の対談も行った。YAに関する講義に引き続いて、子どもの本の現状と問題点について、受講生から質問や意見をいただきながら、対談形式で考えようとしたのだ。これも、今までにない試みである。こうした試みが、いつも必ず有効とは限らないが、今後に生かせるものがあつたらよいと思う。

図書館にやって来る子どもたちの視点から児童資料について学んだ2日間だった。

(みやかわ たけお 国立国会図書館客員調査員、武蔵野大学教授)

# 電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテンツ 「『コードモノクニ』掲載作品検索」

国際子ども図書館は、2009年5月5日(火)、国際子ども図書館ホームページ上の「絵本ギャラリー」(注1)で「『コードモノクニ』掲載作品検索」の提供を開始した。

「『コードモノクニ』掲載作品検索」は、大阪国際児童文学館等の協力を得て、国際子ども図書館でデジタル化を行った絵雑誌(注2)「コードモノクニ」を、デジタル画像で提供するデータベースである。



今回は絵雑誌「コードモノクニ」の中から、著作権保護期間満了が判明した約1,600画像を公開した。今後も順次データを追加していく予定である。

(注1)「絵本ギャラリー」(<http://www.kodomo.go.jp/gallery/>)は、絵本の発祥から20世紀までの発展の流れを、内外の貴重な絵本の画像や音声によりインターネット上で紹介するコンテンツであり、現在七つのコンテンツを提供している。

(注2)「絵雑誌」とは、どのページにも絵を掲載した多色刷りの児童雑誌のこと。日本では、幼児教育に目を向けられた明治30年代後半から次々に刊行されてきた。

(企画協力課企画広報係)

## 韓国国立子ども青少年図書館との交流事業

2008年10月に韓国国立子ども青少年図書館長李淑鉉（イ・スッキョン）氏が国際子ども図書館を訪問した際、お互いの交流を深めるための業務交流及び互いの国の児童書を知ってもらい、利用してもらうための小展示の提案がなされた。

その後両国で協議した結果、2009年度と2010年度の2回にわたり、業務交流と小展示を行うこととなった。2009年度の業務交流は、国立国会図書館と韓国国立中央図書館の日韓業務交流時に国際子ども図書館から1名を韓国へ派遣した。2010年度は韓国から職員を招へいする予定である。

### 1. 韓国国立子ども青少年図書館との業務交流

網野 美美

2009年11月4日(水)から5日(木)にかけて、韓国の国立子ども青少年図書館（국립어린이청소년도서관）及び関係機関を訪問し、業務交流を行った。

韓国国立子ども青少年図書館との交流は今年が第1回目であるため、まずは双方の図書館の全体的な業務について報告した。その中でも国立子ども青少年図書館は、読書振興プログラムの開発・普及に力を入れ、様々な支援を行っていることがうかがえた。例えば、読書教室やストーリーテリング、「本を読むあそび場」（読書と演劇あそびを結合したプログラム）など、多様な読書プログラムの運営マニュアルを作成するとともに、優れた運営事例を集めた事例集を発刊し公共図書館などに配布することで、読書プログラムの普及に努めていることなどが挙げられる。

また、図書館へのアクセスが困難な児童養護施設や山奥にある学校などの子どもたちを対象に、読書習慣作りを助け、図書館サービスを提供するための「図書館といっしょに本を読む」事業を2007年から実施している。読書プログラムの運営主体は公共図書館だが、国立子ども青少年図書館は支援対象図書館を選定し、主催者としてプログラムに必要な資料と講師費用などを支援している。今回訪問した春川市立図書館は2009年の支援対象（50館）に選ばれ、山村の子どもたち約20人を対象に、講師と一緒に本を読み、多様な体験学習をする「星明り勉強部屋」を運営していた。視察当日は、歴史の本に載っている土器などを、本を見ながら粘土で実際に作ってみるといふ活動をしており、子どもたちが生き生きとして楽しそうだったのが、印象的だった。

国立子ども青少年図書館の資料室は「子ども資料室」、「外国児童資料室」、「マルチメディア室」、「書庫資料室」、「研究資料室」、「青少年資料室」に分かれ、1階から3階に置かれている。1階にある「子ども資料室」は靴を脱いで入る韓国伝統の

オンドル部屋（床暖房）で、奥には乳児用資料を集めた「絵本の国」もあり、小さな子どもが床に直接座りくつろぐことができる空間となっている。翌日見学に行った蘆原子ども図書館でも、幼児閲覧室はオンドル部屋であった。さすが韓国！処々に韓国らしさを感じられる業務交流となり、直接見学できたことのすばらしさを感じた。

（あみの よしみ 資料情報課主査）

## 2. 小展示交流

### 「韓国の子どもたちのお気に入りの本 —韓国国立子ども青少年図書館が選んだ子どもの本—

2009年10月22日（木）から2010年1月22日（金）の期間、標記小展示を「世界を知るへや」の展示コーナーで開催した。この小展示は、韓国国立子ども青少年図書館長来日の際の懇談を踏まえ、実施方法について両者で協議した結果、自国の子どもたちに愛されている本を紹介しようということで、韓国側が「韓国の子どもたちのお気に入りの本—韓国国立子ども青少年図書館が選んだ子どもの本」、当館側からは「長く読み継がれている日本の絵本」をテーマに、リストを交換し、それぞれの館で資料を入手し、展示することとした。2009年3月までに展示候補資料40冊のリストを交換し、未収の絵本については新たに入手し、その後、双方の言語での紹介文の作成、その交換、翻訳などを行い小展示の実施となった。ちなみに今回紹介のあった40冊の韓国語の絵本のうち、15冊しか日本語への翻訳は見付からなかった。逆に今回日本から紹介した40冊の絵本については23冊の韓国語の翻訳があることも分かった。



「世界を知るへや」展示コーナー

韓国側が選んだ子どもの本」、当館側からは「長く読み継がれている日本の絵本」をテーマに、リストを交換し、それぞれの館で資料を入手し、展示することとした。2009年3月までに展示候補資料40冊のリストを交換し、未収の絵本については新たに入手し、その後、双方の言語での紹介文の作成、その交換、翻訳などを行い小展示の実施となった。ちなみに今回紹介のあった40冊の韓国語の絵本のうち、15冊しか日本語への翻訳は見付からなかった。逆に今回日本から紹介した40冊の絵本については23冊の韓国語の翻訳があることも分かった。

韓国側のリストの中の『マンヒのいえ』、『こいぬのうんち』、『ふわふわ・くもパン』などはすでに日本語で翻訳出版されて知名度もあるが、未訳の絵本についても、あらずじや本の内容が分かるように韓国側に紹介文の作成をお願いし、本の表紙裏



資料に貼付した紹介文

に貼った。また、翻訳のある絵本については原書の絵本と一緒に並べて展示した。展示は「世界を知るへや」で行ったため、展示資料を見ながら、韓国についていろいろ調べることができるという利点があった。また、その隣の「子どものへや」でも、今回の展示以外に、韓国語の絵本を開架して提供している。

韓国側の紹介文の内容の確認に当たっては、翻訳本があればそれを参照するのはもちろんであったが、韓国語

の絵本の紹介をしている日本語のウェブサイトなども参照した。しかし、そのようなサイトなどに掲載されていない資料もあり、韓国でよく読まれている絵本が必ずしも日本に紹介されているわけではないということが今回明らかになった。

広報は、図書館協力ニュース、当館ホームページを利用して行った。当館のホームページには展示リストのほか、絵本に添付したのと同じ紹介文を掲載しているので、今後も活用していただければと考えている。

(URL: <http://www.kodomo.go.jp/childroom/notice/month.html>)

韓国側での展示は2009年10月13日(火)から12月13日(日)までであった。展示資料は、日本の絵本のほか、韓国語に翻訳された日本の絵本、今回当館に紹介された韓国語の絵本、日本関係の韓国語の絵本等150冊であった。



韓国側の展示風景

(児童サービス課)

# 「読書人の国を造る」ことを目指す人たち ～ローマ・ミラノ出張報告

小林 直子

読書人の国を造る (raising a nation of readers) — ちょうど本誌が刊行される2010年は国民読書年。そのキャッチコピーにでもしたいようなフレーズだが、これは2009年8月にイタリアで開催された国際会議に冠せられたタイトルである。その会議は、世界図書館情報会議—第75回国際図書館連盟 (IFLA) 大会の直前に行われた IFLA 児童・ヤングアダルト図書館分科会 (以下、児童 YA 分科会) 及び読書・リテラシー分科会共催のプレコンファレンス。筆者は前者の分科会の常任委員会委員としてプレコンファレンスを含む様々な会合に参加したので、ここでは主だった会合の概要や印象に残った発表などについて紹介する。

## <プレコンファレンス>

上記のプレコンファレンスは、地元イタリアを中心に23か国から約150名の参加者を得て、8月19日(水)~20日(木)の2日間、ローマで開催された。日本を含む13か国から計17の発表が行われたが(注1)、乳幼児を対象とした全国的な読書への導入プロジェクト(ブックススタートなど)の紹介が多かった。子どもの読書のための全国的なプロジェクトは、どの国でも予算が付きにくいものだが、PISA(OECD生徒の学習到達度調査)の順位下降をきっかけにお金が付いたという事例が目立ち、同調査の影響力を改めて痛感した。

地元イタリアからは、図書館員と小児科医の2人が、0~6歳向けのプロジェクト「生まれたら読む(Nati per Leggere)」を紹介した。読み聞かせを通してどの子にもリテラシーの獲得と健やかな発達の機会を与えようというもので、リーフレットで読み聞かせのメリットを伝え、本のプレゼントをして親子を読書に導くという全国規模の活動を10年前から行っている。本の価値を知っており、かつ子ども向け催し物を企画することができる図書館員と、親たちにとって身近な存在でありかつ頼りにされる小児科医—両者が組んで活動をリードすることで、親に一目を置かれつつ読書推進ができる、というわけである。活動自体はそれほど珍しい手法ではないが、小児科医を図書館員のパートナーとして位置付けているところが興味深かった。



プレコンファレンス会場のロゴ看板 於 ゲーテ・インスティテュート・イタリア

### <第75回 IFLA 大会>

大会は8月23日(日)～27日(木)に、ミラノで開催された。8月24日午後には、児童 YA 分科会と図書館建築分科会合同のオープンセッションが行われた。参加者450名という大盛況で、4時間にわたり7本のペーパーが発表された。内訳は、図書館建築、児童サービスの双方から基調講演が1本ずつ、双方の視点を備えたケーススタディが4本、それに350人の子どもたちから図書館建築やサービスについて希望を聞き取った調査報告であった。

図書館建築の基調講演では、社会が児童図書館に求める機能が時代によって変化していくのに伴って建築も変わってきたということが、具体的な事例とともに示された。児童サービスの基調講演では、図書館の所蔵品を子どもに届けて文化に触れてもらう活動を **physical library** (形ある図書館)、子どもがメディアミックスの現代社会に必要な情報を獲得し発信する力を身に付けるきっかけを提供する活動を **virtual library** (形なき図書館) と整理し、両者ともに必要であること、両者の比重はその図書館が置かれた社会によって異なることが論じられた。4本のケーススタディはそれぞれに基調講演を具体化したものになっていた。例えば、新図書館計画チームに図書館員・建築家・デザイナーのほか、子どもたちも本格的に参加したというオランダのケースは **virtual library** の比重が大きい事例で、いろいろなメディアを使いこなして子どもたちが表現活動をできるようにサポートする図書館の様子が、楽しい写真とともに披露された。発表原稿は、すべて **IFLANET** に掲載されており(注2)、魅力的な児童図書館の写真も多数見ることができる。

### <児童 YA 分科会常任委員会>

常任委員会にはアジア、中東、ヨーロッパ、南北アメリカ諸国から20名の委員が出ているが、全員が図書館員というわけではない。公共図書館職員のほか、元図書館員で現在は読書コンサルタント、図書館を応援する市民活動に携わる人、地方自治体の文化行政担当者、子ども・読書等をテーマとする研究者などがある。立場は様々だが、全員が「読書人の国を造る」ことを目指す人たちなのである。

プレコンファレンスに合わせて行われた「世界の赤ちゃん絵本」の展示及び常任委員会で話し合われた児童 YA 分科会の新規企画「姉妹図書館」については、『国立国会図書館月報』(2009年12月号)の記事「読書人の国を造る」で述べたので、そちらも併せてお読みいただければ幸いである。

(注1) この会議の要旨集は、以下で見ることができる。

[http://www.comune.roma.it/was/repository/ContentManagement/information/P356361902/ifla\\_prog\\_abstract\\_10\\_07\\_09.pdf](http://www.comune.roma.it/was/repository/ContentManagement/information/P356361902/ifla_prog_abstract_10_07_09.pdf)

(注2) <http://www.ifla.org/annual-conference/ifla75/programme2009-en.php>

(こばやし なおこ 児童サービス課長)

# タイの子どもの本事情

竹内 より子

## 1. タイの児童書発展は読書推進活動とともに

「さあ子どもたち、3時からお話が始まりますよ！本を読んだ後は、おやつもありますよ、みんないらっしやい！」

タイの首都バンコク。今や高層ビルが立ち並ぶ国際都市であるが、その中心部に市民の憩いの場、ルンピニー公園が広がっている。椰子や熱帯樹木の緑豊かな広さ0.57km<sup>2</sup>の敷地内には、プール池や図書館、遊具施設などがある。そこで2008年から毎週土日、午後3時になると、シーナカリンウィロート大学（以下シーナカリン大学と略する）の児童文学科アチャラー・プラディット教授と学生たちの野外お話会が催されるようになったのだ。2009年10月、私もバンコクに赴き、「日本人会バンコク子ども図書館」の仲間と一緒に参加させてもらった。きっかけは、私が日本でのお話会のためにタイの絵本『ソムタム・ポクポク』をパネルシアターに仕立てたのだが、それをブログに書いたのを現・泰日工業大学副学長であり、児童文学者・日本語翻訳家、そしてこの絵本の作家でもあるポンアノン・ニヨムカー先生が目にとまれて、タイに持ってきて参考に見せてほしいと言われたからだ。当日は2005年バンコクに創設されたメディア総合型図書館 TK (Thailand Knowledge) パークのスタッフも見学に来られた。

タイはあいにくの雨季だったが、拡声器の呼び掛けに40人くらいの子どもたちが集まってきた。晴天の日ならもっと多いそう。まずスタッフたちは、ポータブル・ライブラリーを運び込んだ。これは、かばんのような持ち手が付いた大型のトランク状の木箱で、開くと書棚が現れて、すでに本がセットされているという仕組みなのだ。子どもたちは始まるまで自由に本を取り出して読んでいた。

ポータブル・ライブラリーは1979年に開始したプロジェクトであり、地方の学



ポータブル・ライブラリー



校に図書室を寄贈するより迅速で安価に対応できるものとして効果をあげている読書推進活動である。タイの児童書開発と発展はこの活動により実質上軌道に乗ったと言える。企画したのは当時シーナカリン大学図書館学科教授であったソンプーン・シンカマーナン女史。この活動は1989年に **IBBY** 朝日国際児童図書普及賞を受賞している。そしてシーナカリン大学は、現在タイで唯一児童文学学士号を授与している大学である。

タイはもともと口承文化の国であり、近代文学の登場と「読む本」の普及は日本の明治に当たる時代に留学した王族や富裕層が紹介するまで待たねばならず、「子どものための図書」という意識は更に遅れていたのだ。アチャラー先生によると、児童書の購買層であるタイの保護者や教師たちの良書に対する理解は、読書推進活動の地道でたゆみない展開により、ここ10年ほどで進歩してきたようだ。タイの児童文学界発展のためには、大人たちへの啓発も兼ねた読書推進活動を伴うことが必要不可欠なのである。

私はタイに駐在する日本人主婦たちが1995年に創設した「日本人会バンコク子ども図書館」の一員であったが、ソンプーン先生やポンアノン先生からの様々な活動への協力依頼にも応えてきたため、「同志」的思いがある。ポータブル・ライブラリー健在の様子と、新たな読書推進活動の取組みを目の当たりにすると、胸の高まりを抑えられなかった。パネルシアターにも子どもたちは生き生きと応答してくれて楽しいひとときを持った。

## 2. 1980年代までのタイ児童文学

さて、タイにおいて児童書創作への関心の契機となったのは、1972年から開始した全国図書週間の図書コンクールと言われる。一般書のみならず児童書部門も設けられたのだ。当初は国立図書館長・ユネスコ委員を務めたメンマート・チャワリット女史のような有識者たちが牽引された。その結果、70年代以降の作品の中には今も「現役」として文部省や読書推進の推薦図書になっているものが少なくない。またタイでは一般文学においても主人公の子ども時代から描いているものも多く、青少年用の推薦図書となっている。邦訳もある主な例としては、スワンニー・スコインター『その名はカーン』（1970年 **SEATO** 文学賞）、ティップワーニー・サニットウォン『お祖父さんとお祖母さんが子どもだった頃（邦題『お祖母さんの木の遺産』）』（1975年国語副読本指定）、カムプーン・ブンタウィー『東北タイの子』（1979年東南アジア文学賞受賞）。また邦訳はないが、現タイ国王ラーマ九世陛下の内親王シリントーン王女殿下がウェーングーオの筆名で描かれた『ゲーオちゃんがいちばん』（1978年）は2007年にアニメ化、2009年には **TV** ドラマ化（両者ともインターネットで公式に無料配信されている）され、東南アジア文学賞受賞者マーラー・カムチャンの創作児童書『人食い谷』（1985年）は2007年に **TV** ドラマ化され公式サイトもあり、**DVD** も販売されている。

### 3. 1990年代のタイ児童文学

この年代は、タイの創作絵本が開花した時期である。作家たちの多くはシーナカリン大学とポータブル・ライブラリー活動から理論と実践を学んでおり、アチャラー教授によると、「親から子へ読み継がれる」絵本になりつつある作品もこの時期に生まれているという。アチャラー先生の選択する代表作はチーワン・ウイサーサ『イーレーンケーンコーン（注・ガチョウの鳴き声）』（1995年）、プリーダー・パンヤーチャン（野間国際絵本原画コンクール受賞者）、『やまあらしのあまやどり』（1997年）、そして、この二人とクルーク・ユンパン（野間国際絵本原画コンクール受賞者、シーナカリン大学児童文学教授）の共著『グラドック・グラディック・グラドック・グラデック（注・バツクの飛ぶ音）』（1996年）ということだ。題名から分かるように言葉遊びも取り入れられているのだが、実はタイでは、口承文学の伝統とともに、韻文学の伝統が今も生きていて重要視されている。そして絵本も多く韻文で書かれており、子どもたちはすぐにそのリズムに親しんで繰り返し愛好するのだという。同じ意味でこの時期翻訳されたタイ語版『ぐりとぐら』も、リズムの良い歌とともに今もよく読まれているようだ。

90年代銘記すべきは、タイ図書出版販売協会が、タイの潜在読者層掘り起こしのために文部省と協力して開催するようになったブックフェアが、1996年から開始したことである。

タイでは書店の数も少ない上、店頭にも売れ筋の図書しか置かれていない。しかしこのブックフェアでは、大手から個人出版まで100以上のブースが、在庫を割引価格で放出した。そして1999年には初めて、児童書のブックフェアも開催されたのだ。私たちバンコク子ども図書館もこの1999年ブックフェアでは依頼を受けて、展示ブース出店、デモンストレーション・ワークショップを行った。この時はフェアへの入場者は多かったのだが、絵本を見る目はまだもの珍しげで、価格を見て驚いて本を戻す、という様子だった。タイの1日の最低保証賃金が170バーツ（約700円）前後なのに、絵本1冊が150バーツ（約500円）という価格なのだから。しかし一方で、良質な絵本というものがあるということを大人が知る機会ともなった。

ブックフェアは出版界にとっては大きい経済効果があり、現在まで継続して、



ブックフェア

4月と7月（7月は青少年向け）、10月の年3回開催されている。ルンピニー公園のお話会参加はこの10月のブックフェア開催期間に合わせておいたので、翌日会場であるシリキットセンターに地下鉄で赴いたが、会場に入るなり、押し寄せる人々の波に驚嘆した。まとめ買いのため、キャリアバッグ持参の人も多い。ブックフェアは人々が図書購入を楽しみに目指して殺到するイベントになっていたのだ。

この10月のブックフェアは会期10日間でブース数817、入場者数は130万人だったそうだ。驚くべき数と言えるが、図書購入には未だにブックフェアが一番便利な状況は変わらないということでもある。さらにはバンコクと地方の格差問題もある。地方では今も書店もなく図書室もなく、教科書さえ不足している村もまだ多いのだ。

#### 4. 2000年以降と現在の傾向

さて、2000年から現在までの状況であるが、2001年にはタイのIBBY支部が正式に発足し、ブックスタート事業、子ども文庫推進活動などに意欲的に取り組んでいる。タイの児童文学関係者の方々の明るく、勤勉で、しかも様々な社会的困難にも前向きな不屈の精神には頭が下がるし、いつも私まで元気をもらえる。

この時期は90年代の絵本の開花に続き、児童書分野で大事件が起こった。タイ語版『ハリー・ポッター』シリーズの爆発的ヒットによる史上最多の読者層の獲得である。さらに日本のあらゆるコミックスが翻訳出版されてきたことによる影響も現れ始めている。2005年辺りからは韓国のドラマ本及びマンガ学習書の進出もあり、現在



TK パーク

タイの青少年は、欧米ファンタジー、日本マンガ、韓流作品の三つ巴の影響を受けているという。前述したTKパークでも、昨年、今年と館長のお話を伺ったのだが、韓国のマンガ学習書がドラえもん学習書を抑えて、常に貸出しトップをキープしているそうだ。

このような傾向を受けてか、マンガと文学が合体したような「マンガ児童書」と言えるような図書が増加しており、図書週間コンクールでもこの分野の賞も作られている。日本のコミックスはこうした児童向け図書の絵柄に影響を与えたばかりで

なく、タイの文学者、アーティスト、映画監督らも、好みの日本マンガ作品にしばしば言及しており、タイのニューウェーブ・アートシーンのそちこちに浸透していると言える。

もう一つの事件は、2006年ガームパン・ウェーチャチーワの『カティの幸福（邦題『タイの少女カティ』）』が、児童文学でありながら、タイで最も権威ある東南アジア文学賞を受賞したことであろう。この作品は8か国語で翻訳出版され、2009年にはタイで映画化もされている。作者はタイ語版『ハリー・ポッター』シリーズの責任編集者でもあり、愛読書はククリット・プラモート『王朝四代記（邦訳あり、タイ宮中に仕える女性の生涯を子ども時代から描いている）』（1951年）、スワンニー・スコンター（前述）、そしてローラ・インガルス・ワイルダーの『大草原の小さな家』シリーズ（タイ語版あり）であるということで、タイ文学と欧米文学の良さを融合する試みが成功した作品とすることができる。

## 5. タイの伝統文学と仏教の影響

さてタイのブックフェアのブースを見ていくと、いくつかのタイならではの特徴に気付かされる。一つは、タイの伝統文学を題材にした絵本が増えたことだ。例えばタイ版『ラーマヤナ』である『ラーマキエン』（魔法を使える白い猿のハヌマンは人気者）や、詩聖と言われたストンプーの叙事詩『プラ・アパイマニー』（1870年）の中から、龍馬に乗る子ども仙人が主役の『スサーコーン』の章などは、アニメ風のものから創作絵本まで多様である。創作児童文学でも、怪しいオンラインゲームの黒幕を探る『トッサカン・オンライン』（2007年）というものまであった。トッサカンは『ラーマキエン』中、10の頭を持つ敵役の鬼王である。

また今回特に注目したのは、仏教関係書のブースが多く、しかも老若男女問わずたくさんの方が購入していたことであった。特に仏教エッセイの人気は高いようで、こうした時代だからこそ心の平安を求めるのだろうか、仏教国の慣習で親しんでいるからだろうか。人気若手僧侶ウォー・ワチラメーティーの伝記マンガは日本のコミックスと並んでいたし、10冊以上はある彼のシリーズ仏教エッセイの中の『仏法は翼をつける』（2004年）はタイのアイドルであるゴルフ&マイク（日本でもデビュー済み）も読んでいるとテレビ番組で語っていた。そのイラストを手掛けているのが、実は前述したタイの代表的絵本作家の一人、チーワンで、彼の最近作『ニン』（2007年）などはその仏教の精神を生かしたということで、無視できない傾向だと感じた。

以上駆け足で概観したのであるが、児童書調査にはシーナカリン大学中央図書館サイトの各賞リスト、ネット書店 CHULA BOOKS サイトの文部省推薦図書、大手児童出版社 PLAN FOR KIDS、NANMEE BOOKS、AMARIN 出版内のネット書店 NAIIN.COM のサイトが役に立つ。また購入には、ブックフェアの時期でなければチュラーロンコン大学書籍部が充実している。

（たけうち よりこ タイの子どもの本研究者）

## イスラエルの児童書

母袋 夏生

(注)「」の図書は邦訳なし。

### はじめに

- まず、イスラエルについての統計的数値（2009年6月調べ）を記すと、
- \*面積は約22,000km<sup>2</sup>（四国よりやや広く、緯度は九州南端海上に当たる）
  - \*人口は742万人（旧ソ連崩壊でソ連系が流入、20%を占める）
  - \*ヘブライ語とアラビア語が公用語。英語も広く通用する。識字率は96.5%。
  - \*出版状況（**Jewish National & University Library** 2008年度調べ）は、年間出版総点数7,414点（書籍6,384点、新刊雑誌や機関誌650点、CD類380点）、児童書は638点で全体の10%を占める。
  - \*出版書籍（6,384点）の言語内訳：ヘブライ語5,621（うちオリジナルは83%、翻訳ものが15%）、英語368、露語206、アラビア語121、スペイン語21、仏語18、イディッシュ語12、ルーマニア語8、独語6、のほかユダヤ・タジク語、コーカサス語、和蘭語、伊語、ポーランド語など。

以上から多言語な人口構成だと分かる。アラブ系（パレスチナ人）人口が多く、アラビア語書籍出版も多いが、本稿はヘブライ語の書籍に限定する。

2008年度、幸いにもイスラエル・ヘブライ語児童図書関連の選書リストを作成する機会を得た。それでというわけではないが、急いで国際子ども図書館のウェブサイトを検索したところ、すでに同館にはヘブライ語図書が76点所蔵されていた。邦訳出版されているケレットとルートゥ・モダンの絵本『パパがサーカスと行っちゃった』（評論社）、オルレブ著『走れ、走って逃げろ』（岩波書店）、タマル・ベルグマン著『サンバードの来る窓』（富山房インターナショナル）などの原書、各国で人気を博し演劇化もされているロニット・ハハム&オーラ・アヤルの絵本「五人の魔女、散歩におでまし」やゼブ賞や英国ブッカー賞に相当するサピール賞受賞作品など、目配りのきいた蔵書である。選書リストの情報収集を始める前に、イスラエルのテルアビブにあるヘブライ文学翻訳インスティテュート（**The Institute for the Translation of the Hebrew Literature**）に協力を仰ぐと、早速、「読書推進運動 *Mitz'ad HaSfarim*」の最近数年の推薦図書リストが送られてきた。教育文化省の主導によるこの読書推進運動は、学校図書館や地域図書館や青少年文化センターをフル活用した全国規模の運動で、小・中・高の年齢別の推薦図書リストを基に、各学校図書館がリスト掲載の書籍を廉価に購入できるよう補助金も出るという。イスラエルの教育制度は小学校6年（1年生から6年生）、中学校3年（7年生から9年生）、高等学校3年（10年生から12年生）と、日本の学年割りとほぼ同じなので推薦図書リストも比較検討しやすい。

## ゼブ賞やベン・イツハク賞など。童謡と絵本

イスラエルの児童書の賞としては年1回、優れた児童文学（YAを含む）作品に与えられるゼブ賞（Pras Ze'ev Lesifrut Yeladim VeNoar）があり、これはグーグルを検索するとヘブライ語だが一覧表を閲覧できる。優れたイラストレーション作品には1978年から2年に1回、エルサレムにあるイスラエル美術館からベン・イツハク賞（Pras Ben Itzhak）が授与されている。受賞作品を盛り込んだ「大イラストレーション」がアム・オベッド社から2004年に出ているし、翻訳インスティテュートからは近年の受賞作品と出版作品を組み合わせた小型冊子が出ている。その他、ラマダン賞やホロコースト記念館のヤド・ヴァシエム賞、文部省や各自治体による賞があるが、ネットでの検索は難しい。

建国後60年の若い国にもかかわらず、目まぐるしく変動する政治・社会状況や不穏な中東情勢を反映してか、児童書のテーマでさえも激しく動いているのが受賞作品を見ていくと分かる。ゼブ賞受賞作品群が、その辺りを如実に反映していた。

イスラエルの童謡や絵本は、旧約聖書の詩編や雅歌などの韻文学が教養の土にあるからだろうか、韻を踏んだリズムのある詩文に重きが置かれている。加えて、ナタン・アルテルマン、シュロンスキー、レア・ゴールドベルグらの著名な詩人たちが童謡を書いたり絵本の文章を担当してきた歴史があって、そのせいか文章重視に傾いて文字量が多い。見開きページで文と絵の比重が6：4あるいは7：3になっている。見て楽しむというより、読んで耳から聞いて楽しむことに力点が置かれている。しかも絵本を検索すると、文章作家と画家との共同作品であるはずなのに文章作者名のみのもも多い。残念だ。かつて、イスラエル・レルマンの「我が一族」シリーズが「オーラ・エイタンの挿絵が楽しくてすばらしい」と大学生たちにも評判で、空前のヒットになったことがある。あちこちに散りばめられた軽妙なタッチの挿絵が自伝的要素の強い作品の面白みを高めて、当時としては斬新な試みの文と絵のコラボ作品だった。いまではヨスイ・アブラフィア、ルートゥ・モダン、クリスティーナ・カドモン、アブネル・カツツ、オーラ・アヤル、アローナ・フランケルらの独自の作風を持ったイラストレーターが絵本や読み物の挿絵で活躍し、読者に受け入れられているのが心強い。オーラ・エイタンには『編みものばあさん』（径書房）やアメリカの作家と組んだ『お日さまがしずむ、夜がくる』、『ハンナのあたらしいふく』（2点とも福音館書店）ほか邦訳出版された作品が多い。

大人向け文学作家として知られるピアリク、レア・ゴールドベルグ、アモス・オズ、グロスマン、サミ・ミハエル、メイル・シャレヴ、ルツ・アルモグ、シュラミット・ラピッド、ナヴァ・セメルらには良質の児童向け作品がある。第一線の児童書作家には国際アンデルセン賞を受賞したウーリー・オルレブ、ダニエラ・カルミ、ガリラ・ロンフェデル、デボラ・オメル、タマル・ベルグマン、ドリット・オルガッドらがいるが、多作なのでふるいにかげざるを得なかった。

## 選書リスト作成上のテクニカルな問題としての翻字と ISBN

旧約聖書の言語であるヘブライ語は右から左方向に書く。ヘブライ語の翻字 (transliteration) 法には数通りあるが、翻訳インスティテュートのウェブカタログの音表記は最も素直にヘブライ語 (文字) が浮かぶので、選書リストの翻字基準とした。最大の問題は ISBN だった。イスラエルでは同国内のみで通用する Danacode が一般的で ISBN 記載が義務化されていないため、ISBN なしの書籍がいまだに大半を占めている。エルサレムにある同国最大の図書館、国立ヘブライ大学図書館 (Jewish National & University Library) のサイト (英語とヘブライ語) からなんとか ISBN 検索にたどり着けたが、選書した302点中、ISBN があるのは95点。全体の32%にとどまった。その後の追跡調査では、かなりの書籍に ISBN が記載されだしている。数年後には全書籍に記載されるようになるだろう。

情報収集や資料検討には、翻訳インスティテュートのサイトが有効だ。英語で作家作品一覧や梗概こうがいが読めるし、毎春ボローニャ図書展前と秋のフランクフルト図書展前に新しい作家や作品が加わる (<http://www.ithl.org.il/>)。国立ヘブライ大学図書館サイトも英語ですべてチェックできる (<http://www.jnul.huji.ac.il/>)。各出版社のサイトも造本形式や梗概まで閲覧できるので便利だがヘブライ語のみである。

## 読書推進運動と作家との出会い、ヘブライ語書籍週間

筆者がエルサレムに留学したのは70年代前半、今から約35年前になる。当時もてはやされていた児童文学作家のヨアシュ・ビベル、ウリエル・オフエク、ナフム・グットマンは過去の人になっている。当時から売れっ子のデボラ・オメルは今なお新しい分野での作品を問うて第一線を確保しているが、これはまれなケースと言える。そうした新旧交代の中、近年の世界的な復刻・復刊ブームの波に乗って、ピアリクヤレア・ゴールドベルグが新しい画家と組んで装いも新たに、親子三代にわたって愛されているのが目に付く。古典作品と組んだ新しい実力派の画家、アフラ・アミットやリナット・フッパー、ダニ・カルマンのイラストが新鮮である。

邦訳作品のあるオルレブ、ガリラ・ロンフェデル、ダニエラ・カルミ、アローナ・フランケル、オルガッドらに混じって、ロニ・ギブアティやヨナ・テッペル、アミ・ゲダリアやナヴァ・マクメル・アティール、タミ・シエム・トヴ、タマル・ヴェレテ・ゼハビたちが話題作・問題作を引っさげてゼブ賞やヤド・ヴァシエム賞を受賞したり、新聞に取り上げられだしている点も特記しておきたい。

「読書推進運動 Mitz'ad HaSfarim」では、前述の補助金のほか、参考ウェブサイトの紹介、芝居や朗読会、作家や画家の創作現場への立ち会いなどの催しをたくさん行っている。子どもたちも想像力を喚起され、芝居づくりや映像フィルム作成、絵画や文章創作と、積極的に自己表現している。

その推進運動の推薦図書リストを見ると、10~12年生 (日本の高校に相当) 向け図書はほとんどが大人向けの文学で、しかも内容的に難度の高いものが並んでいる。

イスラエルには高校卒業と同時に男子3年、女子21か月の兵役義務がある。戦時下ではないが、常に紛争や小競り合いがあり、テロが頻発しているこの国の現状を映し出すように、兵役、戦争、テロ、中東紛争、民族問題、宗教をテーマにした作品が推薦図書に入っている。ロン・レシエムの「もし天国があるなら」は停戦直前の南レバノンでいずれは放棄する要塞を守る兵士たちを描いた作品。サピール賞を受賞し、映画化もされてベルリン映画祭では監督賞を受賞している。ドヴ・インディグの「タリアへの手紙」は宗教学校イエシバの青年と世俗の少女タリアとの書簡体小説で、イエシバの青年は第四次中東戦争で戦死する。ほかにイラク出身兵士とアラブ少女ヤスミンの恋を描いたエリ・アミールの「ヤスミン」や、犯罪や麻薬を扱ったドッドゥ・ブスイの「ペレ・アツイル」が目を惹く。

7～9年生（日本の中学校に相当）向けや小学校高学年向けでも、同様の問題を平易に記した作品が多い。イスラエルで頻発しているテロの恐怖とトラウマ克服を描いたスマグル・シールの「十回目手術」やタマル・ヴェレテ・ゼハビの「余波」は、テロに遭遇した本人の独白体ゆえの緊迫感と説得性がある。

他にも、麻薬、暴力、いじめ、摂食障害、外国人労働者、移民、出身地別の階層的な差別、ホロコースト（第二次世界大戦時のナチスによるユダヤ人虐殺）やその第二・第三代が抱える問題、そして時々刻々の現代史が、自分探しやアイデンティティー模索もの、恋愛ものや魔女物語や IT 関連ものと同列に並んでいる。なかでも、民族問題と並んでホロコーストを扱った作品が目につく。ホロコーストの風化を危惧して次世代に語り継いでいこうとする姿勢の表れだろう。タミ・シユム・トヴの「今の名前は？」は、第二次世界大戦中のオランダで、名を変えて隠れ住む娘に送った父親からの本物のカラー絵手紙と娘の物語からなっているが、こうした体験記は歴史的証言としても貴重だといえる。

話変わって、毎年乾季に入る初夏に催される全国規模の本の祭り、青空書籍市がある。これは児童書に限らない、ヘブライ語書籍出版の振興を目指して始まったもので正式名称を「ヘブライ書籍週間 *Shavua Sefer Ivri*」という。各出版社の広告が新聞各紙にたくさん載り、書評誌は分厚くなる。書店でもこの週には特別割引価格になって、人々は縁日を楽しむように青空会場をぶらついて本に親しむいいお祭りだ。



書籍市での子どもたち

もう一つ、イスラエルでは作家や画家との「出会い *Mifgash*」が頻繁に催されている。これは推薦図書リストより歴史があって、筆者も何度か傍聴したことがある。学校や公共図書館や青少年文化センターで、生徒用の椅子に座った作家を生徒たちが囲むと視線が同じになって親密な雰囲気が生まれ、自



然に創作話や質疑応答が交わされ出す。少人数だったり数学年合同だったりだが、こうした作家や画家との出会いは作品の背後にある問題を身近なものとして考えさせたいという配慮から生まれた活動の一つで、教育文化省から補助金が出る。と言っても、おしきせやヒモ付きではなく、子どもたちの希望に沿って学校や青少年文化センターが自由に「出会い」を設定している。読者の反応を直接に確かめられる上に報酬が出るので、作家や画家にとっても有り難い「出会い」だと言える。

## 日本と同じく翻訳大国のイスラエル

ところで、イスラエルは日本にまさるとも劣らない翻訳大国だが、これにはイスラエルという国の成り立ちによるところがある。

イスラエルの国語はヘブライ語で、セム語族（アラビア語、シリア語、エチオピア語、アラム語）に属している。ヘブライ語は22字という少ない文字数で数字まで表現できる便利な言語だが、紀元70年に民族が散り散りになってからは日常言語としては使われていなかった。それぞれ離散した先の土地の住民たちとの摩擦を避けるべく、その地の言語、ロシア語だったりドイツ語だったり、アラビア語だったりスペイン語だったりを使って、ヘブライ語は学問と祈りと商業通信の言語の域にとどまっていた（余談だが各離散地ではその地の言語のほかにユダヤ共同体のみで使用されるイディッシュ語やラディノ語、ジュデオ・アラビックなどが創られて文学も生まれている）。19世紀後半から民族主義運動台頭とともにあちこちの離散地からパレスチナに移住してきた人々は、共通生活言語として「聖なる言葉&学問の言葉」だったヘブライ語を現代言語として復活させた。この現代言語の再生では、未来を担う子どもたちが日常会話はもちろん、学校の授業をヘブライ語で受けられるようにすることに力点が置かれた。全国各地から移民してきた文学者たちは「読書もヘブライ語で」という熱意を持って出身地の名作文学をヘブライ語に訳した、という歴史がある。現代ヘブライ語の祖と呼ばれるエリエゼル・ベン・イエフダ自身フランス語の素養を活かしてジュール・ヴェルヌやユゴーを訳しているし、現代でも、ポーランド生まれのオルレブはヤノシュ・コルチャックやスタニスワフ・レム作品を訳出している。英米文学はもちろん、出身者の多い東欧・中欧やロシア、南米の作品が数多い。出身者はいないが日本文学の翻訳も盛んだ。松尾芭蕉や夏目漱石、谷崎潤一郎や川端康成、村上春樹や大江健三郎、吉本ばななや吉村昭、俵万智や片山恭一などがヘブライ語訳されている。長年ヘブライ語の読書教育に主眼が置かれていた「読書推進運動」も、2008年度からは推薦図書に翻訳作品を積極的に入れたしている。日本の児童文学も近いうちに紹介されるだろう。

現在までに邦訳出版されたイスラエルの児童書は34点。ここ20年の成果である。

選書情報収集に協力くださった在日イスラエル大使館文化部、ヘブライ児童文学翻訳家の樋口範子さん、イスラエル人主婦兼教師のエフラト町川さん、意見を寄せてくださった方々にお礼申し上げます。 (もたい なつう 翻訳家)

# 活動報告

(2009年1月～12月)

## 1. 展示会

国際子ども図書館では、子どもの本の持つ魅力を伝えるとともに、子どもと本の出会いの場を提供することを目的として、国際子ども図書館所蔵児童書を中心に一部他機関から借用した資料を交えて、子どもの本・文化に関する展示会を行っている。2009年は、3回の展示会を開催した。

### ○「ゆめいろのパレットⅣー野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」

[2009年3月14日(土)～7月5日(日)  
計90日：入場者数33,908人]

財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) との共催による展示会。第16回野間国際絵本原画コンクール入賞作品33作品から選んだ68枚の原画と絵本及び関連書166冊を展示した。独創性にあふれた様々な原画を見ることができる展示会であると好評であった。

<本文8～9ページ参照>



### ○「世界をつなぐ子どもの本ー2008年度国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展」

[2009年8月22日(土)～9月27日(日) 計29日：入場者数6,748人]

スイスに本部をおく国際児童図書評議会 (IBBY) の日本支部である社団法人日本国際児童図書評議会 (JBBY) との共催。IBBY が2年に一度開催する世界大会で表彰する国際アンデルセン賞と IBBY オナーリスト賞の2008年受賞図書と関連する邦訳書211冊を展示した。

<本文10ページ参照>

### ○「出発進行! 『のりもの』本めぐりへ」

[2009年7月18日(土)～2010年2月7日(日) 計160日：入場者数45,362人]

鉄道、自動車、船、飛行機の4種の乗り物を大きな柱として、それぞれの発達の

歩みや特徴などについて、国内外の作品を通して紹介した。特別コーナーでは、身近な自転車から宇宙を飛行するスペースシャトル、魔法の乗り物まで登場。明治時代の乗り物絵本や、飛び出すしかけ絵本など、約250点を展示した。また、この展示会では鉄道博物館（さいたま市）から模型や資料等を借用し、展示した。

<本文3～7ページ参照>

## 2. イベント

国際子ども図書館では、各展示会期間中、展示内容への理解をより一層深めるため、展示会に関連した講演会やギャラリートークなどの様々な催物を開催している。

### ○講演会「ラテンアメリカと子どもの本」

[2009年4月25日(土)：参加者47名]

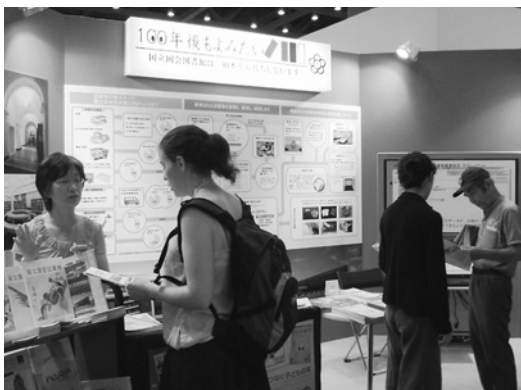
子ども読書の日の行事及び展示会「ゆめいろのパレットIV－野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」関連催物として、ラテンアメリカ地域の子どもの本の事情に詳しい翻訳家、神戸万知氏による講演会を開催した。

スペイン語圏のラテンアメリカ諸国とその地域の代表的な児童書の内容などが紹介され、ふだん目にする機会が少ない地域の児童書を知ることができた。

<本文9ページ参照>

### ○第16回東京国際ブックフェアへの初参加

出版界や図書館・学校関係者、さらに一般利用者による情報交換の場として開催されている東京国際ブックフェアが7月9日(木)から7月12日(日)まで、江東区の東京ビッグサイトで開催された。今回、国際子ども図書館は東京本館とともに、ブースを初出展し、国際子ども図書館の広報を行うために、会場内でパンフレットの配布・広報活動等を行った。



### ○講演会「子どもと『のりもの』一かつての交通博物館での活動を通して」

[2009年7月18日(土)：参加者24名]

「出発進行!『のりもの』本めぐりへ」展の関連行事として、監修者である佐藤美知男氏による講演会を開催した。

2006年に閉館となった交通博物館勤務の経験から、展示・教育活動等の諸活動における子どもたちの印象的な姿が数多く紹介された。子どもはなぜ乗り物が好きなのか、交通博物館がなぜ人々に支持されてきたかなどについても言及され、最後に、子ども時代の多様な体験の重要性を指摘された。博物館からの子どもたちへのアプローチなど、日ごろ聞くことのできない内容であった。

<本文3～7ページ参照>

### ○講演会「乗り物絵本の歴史と魅力」

[2009年10月4日(日)：参加者41名]

「出発進行!『のりもの』本めぐりへ」展の関連行事として、乗り物絵本研究家である関田克孝氏による講演会を開催した。

「絵本といえども歴史の証人」と講師が述べたように、すでに記憶に残っていない乗り物の歴史や当時の社会状況、出版の歴史を、明治時代から刊行されてきた乗り物絵本の画像を用いてたどった講演内容であった。

<本文3～7ページ参照>



### ○講演会「本と子どもと大人をつなぐ場所 “本の城” (IJB) での20年」

[2009年10月24日(土)：参加者99名]

ミュンヘン国際児童図書館 (IJB) で東アジア部門担当者として長年にわたり児童書の収集・整理、類縁機関との交流や展示会企画などに携わってきたガンツェンミュラー氏による、ミュンヘン国際児童図書館の活動とこれまでの経験に基づいた講演会を開催した。

ミュンヘン国際児童図書館は、1949年に開館し、2008年に創立60年を迎えた。東アジア部門担当職員として同館に20年間勤めた講師は、同館の概要、歴史並びに活動を紹介し、そこで講師がどのように日本の児童書と文化について情報発信し続けてきたかについて、豊富なスライドとともに語った。

<口絵及び本文11～14ページ参照>

### ○研修「児童文学連続講座『いつ、何と出会うかー赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで』

[2009年11月9日(月)～10日(火)：修了者67名]

総合テーマを「いつ、何と出会うかー赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」として、全国の公共図書館等において児童サービスを担当する職員と当館職員を対象とした児童文学連続講座を開催した。

<口絵及び本文19～21ページ参照>

### ○第11回図書館総合展への参加

図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換の場である図書館総合展が11月10日(火)から11月12日(木)まで、横浜市のパシフィコ横浜展示ホールで開催された。10回目となった今年も東京本館とともに参加し、会場内でパンフレットを配布するなど国際子ども図書館の広報を行った。

### ○講演会「インド児童文学の現在」

[2009年12月13日(日)：参加者39名]

インドを代表する詩人、作家として数々の業績を残し、子ども向けの本も多く執筆しているインド国立文学アカデミー会長のシュニル・ゴンゴパッドエ氏を招き、インドの児童文学に関する講演会を開催した。

インドは多言語国家であり、それぞれの言語に豊富な児童文学が存在しているゆえに、一概に語るができないこと、その一方でインドには『ラーマヤナ』と『マハーバーラタ』という共通の文学遺産があり、多くの児童文学作品がそれをもとに書かれていること、インド・ベンガル語圏の児童文学界で多くの足跡を残している二大一族についてなど、インドの児童文学をうかがい知ることのできる貴重な講演であった。

<口絵参照>

## 3. 児童サービス

### ○「子どものへや」「世界を知るへや」での子どもと本を結ぶ取組み

<小展示>

以下の箇所で行った小展示を実施した。表紙を見せて本を展示することにより、多くの子どもたちが興味を持ち、手に取って楽しんでいった。

なお、小展示の資料リストは国際子ども図書館ホームページに掲載し、同内容の印刷物を展示期間中配布している（「世界を知るへや：B」は必要に応じて配布）。

[トップページ>子どものへやから>お知らせ>今月の小展示] 参照

### <子どものへや：A>

- 「ふゆあそび」(1月～2月)
- 「花いっぱい春いっぱい」(3月～4月)
- 「お茶の本」(4月～5月)
- 「かさのほん」(6月)
- 「海の本～夏」(7月～8月)
- 「おじいさん、おばあさんと子どもの本」(9月～10月)
- 「秋の森のおくりものーおいしい秋」(11月～12月)
- 「12月のパーティーブック」(12月)

### <子どものへや：B>

- 「冬の食べ物」(1月～2月)
- 「すてきな魔法・おまじない」(3月～5月)
- 「木の本」(6月～8月)
- 「うさぎの本」(9月～11月)
- 「わくわく どきどき 大ぼうけん」(12月～)

### <世界を知るへや：A>

- 「いぬ」(2008年11月～2009年3月)
- 「ねこの本」(4月～8月)
- 「世界をつなぐ子どもの本ー2008年度国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展関連展示」(8月～9月)
- 「韓国の子どもたちのお気に入りの本ー韓国国立子ども青少年図書館が選んだ子どもの本」(10月～) <本文24～25ページ参照>

### <世界を知るへや：B>

- 「日本の童画家」(2008年9月～2009年3月)
- 「ゆめいろのパレットIV展関連展示」(3月～7月)
- 「出発進行!『のりもの』本めぐりへ展関連展示」(7月～)

また、廊下に面した二つの小窓に、季節や行事に合わせて手作りした折り紙や人形などを本とともに飾り、子どもが親しみやすい雰囲気作りを心掛けた。

### <夏休み読書キャンペーン>

子どもたちに本の魅力を伝えるための企画として「夏休み読書キャンペーン2009」を行った。本を読んで問題に答える形式で、設問のカードは初級編・中級編・上級編の三つに分けた。延べ1,200名もの子どもたちの参加があった。3折間

題に加えて、中級編・上級編には記述式の問題も取り入れたため、高学年の子どもたちも満足できる内容となった。

### ○子どものための催物

#### <子どものためのおはなし会>

職員によるおはなし会を、毎週土曜日・日曜日の午後2時から（4歳から小学1年生対象）と午後3時から（小学2年生以上対象）実施した。2009年は合計196回実施し、延べ1,253名が参加した。

おはなし会では主にストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行い、参加した子どもには紹介した本のタイトルなどを記したプログラムと、1回参加するごとにスタンプを押印する「おはなし会カード」を配布している。

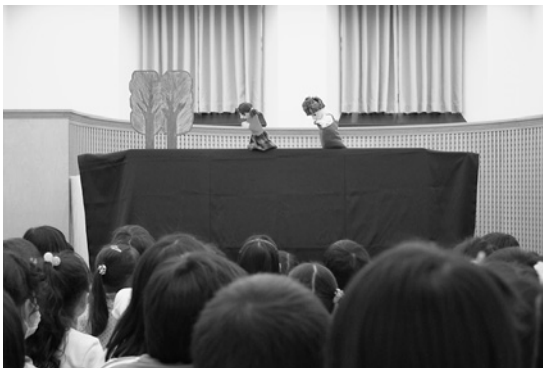
#### <ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会>

3歳以下の子どもとその保護者1名を対象として、月に2度（第3土曜日とそれに続く日曜日の午前11時から）実施している。

2009年は合計24回実施し、延べ186組422名が参加した。絵本とわらべうたを組み合わせ、その日の参加者の年齢や個性に合わせたプログラムで行っている。

#### <子どものためのおたのしみ会>

春休み、こどもの日、秋の読書週間には、普段のおはなし会の内容を拡大し、対象も4歳以上の1種類だけにして、大型絵本の読み聞かせ、パネルシアター、人形劇等を実施した。2009年は各日2回、合計10回実施し、延べ214名が参加した。こどもの日は、1回の参加者が60名と「おはなしのへや」があふれるほどの大盛況であった。



#### <科学あそび「じしゃくのふしぎ」>

7月25日(土)・26日(日)、各日2回計4回（各2コース）を、ホール及びワークルームで実施した。講師は職員が担当した。4歳から参加可能な「さかなつりコース」と小学1年生から参加可能な「スライムコース」の2コースを設けて実施、両

日合わせて延べ104名の参加があった。

「さかなつりコース」では、磁石に付く素材を付けた魚を釣り、「スライムコース」では磁石に付く素材を混ぜたスライムが磁石を飲み込んでいく様子を楽しんだ。

実際に行った実験や発展的な実験が掲載されている資料を紹介することで、本に対する興味を持ってもらった。



さかなつりコース



スライムコース

## ○子どもの見学

### <通常の見学（団体向け）>

1月から12月までに、27件781名の見学を実施した。内訳としては、保育園、幼稚園2件118名、小学校9件443名、中学校13件113名、養護学校1件5名、インターナショナルスクールや日本語学級1件5名、その他1件97名である。

全面開館から8年目となり、毎年見学のために来館している団体や1年間に複数回来館している団体もある。内容は、館内見学（子ども向け当館紹介ビデオの視聴を含む）、おはなし会、調べ学習の援助などを希望により組み合わせ対応している。また、事前の申請がなく、学級・学年単位など大人数で訪れるケースもあったが、できる限りの対応をした。

### <夏休み子ども向け図書館見学ツアー>

夏休み期間中は通常の子団体向け見学を休止して、個人で気軽に参加できる見学ツアーを実施した。対象は小学生以上で、内容は1時間程度の館内見学（子ども向け当館紹介ビデオの視聴を含む）に限定している。7月28日、8月4日、11日、18日、25日に実施し80名が参加した。1回当たりの参加人数を20名とした。見学終了後は



「子どものへや」で行っていた読書キャンペーンへも誘導し、図書館の利用に効果的につなげることができた。

8月18日(火)には、「日中韓子ども童話交流事業」\*の一環として、日本、中国、韓国の子どもたち97名と随行者16名が当館の見学を行った。建物を見学した後は、3階ラウンジに本を展示し、「子どものへや」同様、自由に本を読めるようにした。

\* 「子どもゆめ基金」の活動の一環として、子どもの未来を考える議員連盟、独立行政法人国立青少年教育振興機構により「日中韓子ども童話交流実行委員会」が組織され、交流事業を行っている。



日中韓子ども童話交流事業

### ○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援を目的として、世界の国や地域に関する知識の本とその国の絵本や物語および原語の絵本などを、50冊前後のセットにして、学校図書館に1か月間貸し出すサービスである。申込みのあった学校図書館すべてに希望セットの解題をまとめた小冊子を送付するほか、全セットの解題をホームページ上で公開している。



東南アジア・南アジアセット  
(小学校高学年向け)

2009年1月からは、「東南アジア・南アジアセット」(小学校高学年向け及び中学校向け)を加え、また、既存の「韓国セット」、「アジアセット」をリニューアルし「東アジアセット」(小学校高学年向けおよび中学校向け)として、全部で6種類のセットとなった。2009年には、延べ225校に計10,505冊の資料を貸し出した。

2010年1月からの貸出開始に向けて、新たに「中東・アフリカセット」(小学校高学年向け)を構築した。

## ○その他

「子どものためのおはなし会」でどんなことをやっているのか知りたい、見学したいという要望が多かったため、11月17日と12月1日に「大人のための『おはなし会』体験会」を試行した。「子どものためのおはなし会」と同じ内容を大人対象に行い、延べ63名の参加があった。参加者アンケートでは全員が今後の継続を希望すると回答していた。

## 4. その他

### ○第7回国際子ども図書館連絡会議

[2009年6月17日(水)]

国際子ども図書館の平成20年度の活動について報告し、平成21年度の計画及び将来計画について国際子ども図書館と協力関係にある諸機関から意見聴取等を行うため、連絡会議を開催した。2009年の参加機関は、大阪府立国際児童文学館、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金部、全国学校図書館協議会、東京子ども図書館、読書推進運動協議会、日本児童図書出版協会、日本図書館協会、ブックスタート、文部科学省生涯学習政策局社会教育課、文部科学省初等中等教育局児童生徒課、文部科学省スポーツ・青少年局の13機関であった。

### ○児童サービス連絡会

[2009年10月21日(水)]

都道府県立図書館における児童サービスの現状と課題を把握し、情報共有を図るとともに、国際子ども図書館との連携・協力を強化することを目的に標記連絡会を開催した。メンバーは特色のあるサービスを行っている9機関(石川県立図書館(今年度は欠席)、大阪府立中央図書館、岐阜県図書館、群馬県立図書館、東京都立多摩図書館、徳島県立図書館、福岡県立図書館、福島県立図書館、山口県立山口図書館)である。

<本文15～18ページ参照>

### ○台湾からの実習生の受入れ

[2009年12月16日(水)～12月19日(土)]

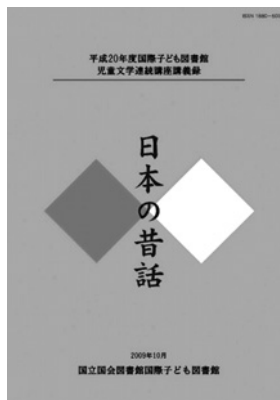
台北市立図書館からの受託研修生1名を受け入れた。研修生は国際子ども図書館の業務の概要説明に続いて、おはなし会の見学を含め、児童サービス業務を一通り体験した。

## 5. 刊行物その他

- ・ 展示会「出発進行!『のりもの』本めぐりへ」小冊子
- ・ 『国際子ども図書館の窓』第9号\*
- ・ 『平成20年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「日本の昔話」』\*
- ・ 利用案内:一般向け、子ども向け(日本語、英語、ハンデル、中国語)

\* 国際子ども図書館ホームページ

(<http://www.kodomo.go.jp>) に PDF 版を掲載している。



# 数字で見る！ 国際子ども図書館

## (1) 国際子ども図書館所蔵統計 (2009年9月30日現在)

資 料 区 分				2009.9.30現在 所 蔵 数	
資 料 情 報 課	図 書 (単位：冊)	日本語	児童書 (* 1)	215,982	
			児童書関連書、参考図書	15,718	
			小 計	231,700	
		外国語	児童書 (* 1)	欧米言語	45,753
				アジア言語	19,550
			児童書関連参考書	3,611	
			小 計	68,914	
		計	300,614		
		逐次刊行物 (単位：タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌
	児童関連誌				772
	外国語			児童雑誌	43
				児童関連誌	30
	小 計		2,221		
	新聞		日本語	16	
			外国語	1	
	非図書資料 (* 2) (単位：枚数及び 物品数)	静止画、紙芝居 (* 3)		17,298 (1,479)	
		カード、カルタ (* 3)		10,367 (171)	
マイクロフィルム		1,288			
マイクロフィッシュ		35,924			
音楽資料 (レコード、CD、カセットテープ) (* 4)		1,803			
映像資料 (ビデオテープ、ビデオディスク)		5,107			
電子資料 (光ディスク、磁気ディスク)		3,728			
児 童 サ ー ビ ス 課 (* 5)	図 書 (単位：冊)	日本語	17,946		
		外国語	2,614		
		小 計	20,560		
	逐次刊行物 (単位：タイトル)	20			
	非図書資料 (単位：点)	280			

※2006年から国立国会図書館の基本統計に基づいた集計方法に変更。  
付随して、集計時期を9月30日現在に変更した。

- \* 1 学校教科書、教師用教科書、学習参考書、楽譜、組み合わせ資料を含む
- \* 2 教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のもの数を含む
- \* 3 括弧内はタイトル数
- \* 4 教師用指導書のみ (児童書音楽資料は未所蔵)
- \* 5 児童サービス課分には、学校図書館セット貸出し用資料を含む

## (2) 来館者統計

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
開館日(日)	22	22	24	24	23	24	26	25	23	26	23	22	284
来館者(人)	8,557	9,951	12,864	15,543	13,079	10,978	9,807	12,894	9,954	10,290	9,008	6,856	129,781
うち中学生以下(人)	1,074	1,212	1,977	2,195	1,563	1,270	1,622	3,302	1,488	1,450	1,233	1,205	19,591
1日平均(人)	389	452	536	648	569	457	377	516	433	396	392	312	457
中学生以下1日平均(人)	49	55	82	91	68	53	62	132	65	56	54	55	69

## (3) 各室利用統計

カウンター・室		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
第一資料室	開室日(日)	19	18	19	20	20	20	22	20	19	22	18	18	235
	利用者(人)	551	577	642	675	872	705	742	909	695	646	640	571	8,225
	1日平均(人)	29	32	34	34	44	35	34	45	37	29	36	32	35
第二資料室	開室日(日)	19	18	19	20	20	20	22	20	19	22	18	18	235
	利用者(人)	342	317	393	445	508	404	393	499	369	363	403	351	4,787
	1日平均(人)	18	18	21	22	25	20	18	25	19	17	22	20	20
子どものへや・世界を知るへや	開室日(日)	22	22	24	24	24	24	26	25	23	26	23	22	285
	利用者(人)	4,232	4,866	6,389	7,051	5,840	5,171	5,208	7,481	4,655	4,951	4,369	3,457	63,670
	1日平均(人)	192	221	266	294	243	215	200	299	202	190	190	157	223
	大人(人)	3,240	3,776	4,712	5,185	4,574	3,937	3,657	4,826	3,448	3,674	3,334	2,477	44,363
	1日平均(人)	147	172	196	216	191	164	141	193	150	141	145	113	156
	中学生以下	992	1,090	1,677	1,866	1,266	1,234	1,551	2,655	1,207	1,277	1,035	980	16,830
	1日平均(人)	45	50	70	78	53	51	60	106	52	49	45	45	59
メディアふれあいコーナー	開室日(日)	21	22	24	24	24	24	26	24	23	26	22	22	282
	利用者(人)	3,329	4,410	5,483	5,639	5,440	4,494	4,737	8,483	4,466	3,276	3,329	2,225	55,311
	1日平均(人)	159	200	228	235	227	187	182	353	194	126	151	101	196

※本のミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

#### (4) 資料出納統計

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
第一・第二資料室	件	892	1,247	1,301	1,219	1,425	1,440	1,376	1,497	1,260	1,517	1,415	1,413	16,002
	点	2,505	2,973	3,157	2,695	3,286	3,126	3,779	3,930	4,254	3,734	3,613	3,192	40,244

#### (5) 複写サービス利用統計

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
来館 申込み	件	456	538	573	548	732	638	717	857	728	691	713	560	7,751
	枚	2,593	3,226	3,189	4,116	4,425	3,149	3,635	8,160	6,321	4,765	2,983	3,355	49,917
	コマ	117	7	6	101	0	70	0	0	0	37	132	4	474
遠隔 申込み	件	121	122	65	119	94	79	88	95	52	89	88	143	1,155
	枚	486	575	496	381	281	220	231	1,461	902	765	395	599	6,792
	コマ	0	0	0	16	0	4	9	0	1	0	0	103	133
計	件	577	660	638	667	826	717	805	952	780	780	801	703	8,906
	枚	3,079	3,801	3,685	4,497	4,706	3,369	3,866	9,621	7,223	5,530	3,378	3,954	56,709
	コマ	117	7	6	117	0	74	9	0	1	37	132	107	607

#### (6) 資料貸出統計

種 別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
国会議員・国会関係者(点)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
行政・司法相互貸出し(点)	0	1	0	6	3	0	11	1	6	0	3	0	31
図書館間貸出し(点)	32	27	37	36	80	64	38	42	41	45	40	27	509
学校図書館等児童書貸出し(点)	2,637	0	0	1,333	1,183	1,136	0	0	1,753	1,152	1,261	50	10,505
展示会出品資料貸出し(点)	9	0	0	0	37	0	0	0	0	2	0	0	48
職員貸出し(点)	0	0	1	0	1	0	232	32	9	2	0	3	280

## (7) レファレンス処理統計

## 1) 文書レファレンス

月	処理 文書 (通)	処理 (件)									
		情報源・文献紹介			簡易な事 実調査	特定資料の調査				利用案内 ・その他	合計
		情報源・ 文献紹介	類縁機 関案内	小計		書誌的事 項調査	所蔵 調査	所蔵機 関調査	小計		
1月	7	3	1	4	2	5	0	2	7	2	15
2月	8	4	0	4	1	9	0	2	11	2	18
3月	8	6	1	7	0	4	1	2	7	4	18
4月	9	5	0	5	0	11	1	2	14	7	26
5月	7	5	1	6	2	5	6	1	12	3	23
6月	13	8	2	10	3	9	4	2	15	7	35
7月	12	6	1	7	1	22	4	2	28	9	45
8月	9	4	1	5	0	6	6	2	14	5	24
9月	8	3	1	4	2	6	1	4	11	4	21
10月	9	6	0	6	0	6	2	1	9	5	20
11月	12	6	1	7	1	17	1	5	23	8	39
12月	11	4	0	4	4	10	1	2	13	5	26
計	113	60	9	69	16	110	27	27	164	61	310

## 2) 電話レファレンス

月	受理 (件)	処理 (件)									
		情報源・文献紹介			簡易な事 実調査	特定資料の調査				利用案内 ・その他	合計
		情報源・ 文献紹介	類縁機 関案内	小計		書誌的事 項調査	所蔵 調査	所蔵機 関調査	小計		
1月	28	5	2	7	3	2	15	2	19	22	51
2月	45	5	4	9	11	5	24	2	31	25	76
3月	37	4	1	5	10	2	23	1	26	31	72
4月	32	5	0	5	2	0	17	1	18	23	48
5月	57	5	0	5	2	1	36	6	43	52	102
6月	37	7	1	8	10	2	13	4	19	27	64
7月	63	11	2	13	6	1	33	7	41	49	109
8月	52	7	3	10	2	3	32	10	45	38	95
9月	31	2	7	9	1	7	19	3	29	16	55
10月	44	4	1	5	5	2	38	4	44	27	81
11月	32	3	0	3	2	1	27	5	33	26	64
12月	35	3	0	3	1	0	26	3	29	28	61
計	493	61	21	82	55	26	303	48	377	364	878
(うち18 歳未満)	4	1	0	1	1	0	1	0	1	2	5

### 3) 口頭レファレンス

月	受理 (件)	処理 (件)												合計
		情報源・文献紹介			簡易な 事実調 査	特定資料の調査			利用案内・その他					
		情報源・ 文献紹介	類縁機 関案内	小計		書誌的事 項調査	所蔵 調査	所蔵機 関調査	小計	利用案内 ・その他	機器操 作支援	検索援助 (機器以外)	小計	
1月	316	26	10	36	8	3	54	19	76	250	23	3	276	396
2月	365	31	8	39	4	6	73	12	91	286	22	12	320	454
3月	326	26	5	31	8	9	76	16	101	331	18	7	356	496
4月	437	49	8	57	7	1	80	11	92	344	34	20	398	554
5月	286	32	6	38	2	7	59	12	78	235	20	3	258	376
6月	440	41	5	46	3	6	70	7	83	354	27	10	392	524
7月	416	54	4	58	8	4	52	23	79	349	32	5	386	531
8月	483	47	8	55	11	6	122	26	154	368	23	2	393	613
9月	315	33	5	38	2	3	79	12	94	247	15	6	268	402
10月	321	48	2	50	2	4	67	13	84	248	13	4	265	401
11月	347	34	5	39	11	5	53	8	66	285	13	5	303	419
12月	328	28	3	31	4	4	70	17	91	250	18	34	302	428
計	4,380	449	69	518	70	58	855	176	1,089	3,547	258	111	3,917	5,594
(うち18歳未満)	625	66	1	67	6	1	102	25	128	480	7	6	493	694

### (8) 参観・見学・利用説明統計

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
件数(件)	17	14	19	14	14	20	19	23	22	24	20	17	223
人数(人)	115	78	137	112	64	228	236	360	221	259	202	391	2,403
(うち18歳未満)(人)	10	1	19	45	10	54	63	173	74	113	57	316	935

### (9) 国際子ども図書館ホームページアクセス統計

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
トップページ [日本語版]	トップページのアクセス(件)	25,151	26,512	25,177	24,321	22,142	20,330	29,400	30,293	25,259	25,999	22,750	21,209	298,543
	1日平均トップページのアクセス(件)	811	947	812	811	714	678	948	977	842	839	758	684	818
トップページ [英語版]	トップページのアクセス(件)	633	607	717	830	500	457	536	524	516	622	481	539	6,962
	1日平均トップページのアクセス(件)	20	22	23	28	16	15	17	17	17	20	16	17	19



# これから...

国際子ども図書館の今後の予定をご紹介します。

## <2010年>

2月20日～9月5日

国立国会図書館国際子ども図書館開館10周年及び国民読書年記念展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」

3月6日 講演会「『ひろしまのピカ』が海を渡ったとき  
～日本の絵本の翻訳出版に携わって」

3月27日・28日

子どものための春休みおたのしみ会

4月24日 講演会「翻訳は三人四脚 『精霊の守り人』の作者と訳者、  
大いに語る」(仮題)

(※「子ども読書の日」(4月23日)の行事を兼ねる。)

5月5日 こどもの日特別催し物(子どものための落語会)

7月24日・25日

夏休み子ども向け催物(科学あそび)

9月18日～未定(予定)

展示会「絵本の黄金時代1920's-30's

—子どもたちに託された伝言」(仮称)

10月30日・31日

子どものための秋のおたのしみ会

11月(予定)

児童文学連続講座

また、年間を通して様々な行事を企画します。詳しくは当館ホームページ  
(<http://www.kodomo.go.jp/>)を御覧いただくか、下記へお問い合わせください。

国立国会図書館国際子ども図書館 電話 03(3827)2053(代表)

## 国際子ども図書館利用案内

ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>  
電話 03 (3827) 2053 (代表) 03 (3827) 2069 (録音による利用案内)

☆来館利用 問い合わせ先：企画協力課 ホームページ > ご利用の案内  
どなたでも利用できます (ただし、第一資料室・第二資料室は満18歳以上の方)。  
開館時間 9:30~17:00 資料請求 9:30~16:30 (於 第一資料室・第二資料室)  
休館日 月曜日、国民の祝日・休日 (こどもの日は開館)、年末年始 (12月28日~  
1月4日)、毎月第3水曜日 (資料整理休館日)  
休室日 休館日のほか、以下の日が休室日となります。  
2階第一資料室・第二資料室：日曜日  
3階本のミュージアム：展示会準備等のための休室日  
所蔵資料 国内で出版された児童図書・雑誌、外国語の児童図書・雑誌、児童書関連  
図書・雑誌等 ※資料の利用は館内のみ。館外への帯出はできません。

☆レファレンス・資料案内 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係  
ホームページ > 資料情報サービス > レファレンス・コーナー  
児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせにお答えします。

◆申込方法：来館、文書、電話

※資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、及び聞き間違いが生  
じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。

☆資料の複写 (有料) 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係  
ホームページ > 資料情報サービス > 利用案内 > 来館してのご利用  
ホームページ > 資料情報サービス > 利用案内 > ご自宅やお近くの図書館からのご利用  
◆申込方法：来館、NDL-OPAC 経由 (登録利用者のみ)、郵送

☆資料の図書館間貸出し 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係  
ホームページ > 資料情報サービス > 利用案内 > ご自宅やお近くの図書館からのご利用  
「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみが対象となります。  
※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など貸し出しできない資料もあります。

☆見学・ツアー 問い合わせ先：企画協力課企画広報係、児童サービス課児童サービス係  
<大人向け> ホームページ > ご利用の案内 > 見学・ツアー  
としょかんコース (毎週火曜日)、たてもんコース (毎週木曜日) ほか  
<子ども向け> ホームページ > 子どものへやから > 子ども向け見学のご案内

☆学校図書館セット貸出し 問い合わせ先：児童サービス課企画推進係  
ホームページ > 学校図書館へのサービス > 学校図書館セット貸出し  
テーマごとに50冊前後で構成する資料のセットを学校図書館に貸し出します。  
※セットに含まれる資料の解題をホームページで御覧いただけます。

---

## 国際子ども図書館の窓 第10号 2010.3

発行所 国立国会図書館 **国際子ども図書館** 2010年3月1日発行  
編集責任者 齋藤 友紀子  
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49  
電 話 03 (3827) 2053 (代表) F A X 03 (3827) 2043  
E-mail info@kodomo.go.jp ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>  
印刷所 株式会社 山越

---

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



# The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No.010 March 2010

## Contents

<b>【Frontispiece】</b>	
<b>【Foreword】</b> .....	Yukiko Saito ..... 1
<b>【Highlights of 2009】</b>	
Exhibition “All Aboard ! For a Trip around Books on Vehicles” ... Exhibition team .....	3
On the Exhibition “All Aboard ! For a Trip around Books on Vehicles” : materials lent from the Railway Museum .....	Michio Sato ..... 6
Exhibition “Palette of Dream Colours IV : Winning Works of the 16 <sup>th</sup> Noma Concours for Picture Book Illustrations from Asia, Africa, and Latin America” .....	Exhibition team ..... 8
Exhibition “Children’s Books link the World—Hans Christian Andersen Award 2008 & IBBY Honour List 2008” .....	Exhibition team ..... 10
“Book Castle,” a place to link books, children and adults ... Fumiko Ganzenmüller .....	11
Conference on library services for children FY2009 : realities and challenges of supporting public libraries .....	Children’s Services Division ..... 15
Report on the ILCL Lecture Series on Children’s Literature—When and what to encounter : from picture books for babies to young adult books .....	Planning and Cooperation Division ..... 19
When and what to encounter : two days of the ILCL Lecture Series on Children’s Literature FY2009 .....	Takeo Miyakawa ..... 20
New addition to Picture Book Gallery—“Kodomo no Kuni magazine article search” .....	Planning and Cooperation Division ..... 22
<b>【International exchange】</b>	
International exchange programs with the National Library for Children and Young Adults in Korea	
1 . Mutual visit program with the National Library for Children and Young Adults in Korea .....	Yoshimi Amino ..... 23
2 . A small exhibition exchange program “Korean children’s favorite books : the books chosen by the National Library for Children and Young Adults” .....	Children’s Services Division ..... 24
People working to raise a nation of readers : visit to Rome and Milan .....	Naoko Kobayashi ..... 26
<b>【Research reports】</b>	
Children’s books in Thailand .....	Yoriko Takeuchi ..... 28
Israeli children’s literature .....	Natsuu Motai ..... 33
<b>【ILCL activity report】</b> .....	38
<b>【ILCL in figures】</b> .....	48
<b>【Schedule】</b> .....	53
<b>【ILCL user guide】</b> .....	54

NATIONAL DIET LIBRARY  
Tokyo